都城市文化財調査報告書　第15集

# 都之城取添遺跡発掘調査概報

1991

都城市教育委員会

# 都之城取添遺跡概報　正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 1 | 12 | 文和元年　文和初年 | 永和元年　永和初年 |
| 3 | 4 | 矢部喜多男 | 矢部喜多夫 |
| 5 | 6 | 規距性 | 規矩性 |
| 5 | 12 | 混灰オリーブ色土 | 灰オリーブ色土 |
| 7 | 表－4 | 壹<br>皿耳壹 | 壺<br>四耳壺 |
| 9 | 14・25 | 第Ⅳ期 | 第Ⅲ期 |
| 9 | 16・26 | 第Ⅴ期 | 第Ⅳ期 |
| 13 | 〔読み下し〕 | ただいま参着候。 | ただいま昼参着候。 |

# 序

都城市文化財調査報告書第15集をここに刊行いたします。

本遺跡は「都之城」の一角である「取添」について、その発掘調査の概要を報告するものであります。

調査は、医療法人仁愛会・横山病院の新築工事に伴い実施したものですが、調査対象区域は建築部分のみに限定され、この中に前建築物の基礎等が残存していたために、極く一部分に留まったものであります。

調査にあたっては横山病院　　の文化行政に対する積極的なご理解により、都城市教育委員会が行ったものでありますが、特に同氏の全面的なご協力に対して、心より謝意を表するものであります。

また、発掘調査に際しましては、調査計画・実施、更に報告書の作成に献身的にご協力いただいた都城市文化財専門員・重永卓爾氏に負うところが極めて大きく、共に発掘作業にご協力いただいた地元の皆さんにも、心からお礼を申し上げたいと存じます。

遺跡からは、当地方における中世の様子を知る上で貴重な資料が出土しており、この調査資料が今後の都城盆地の歴史解明の一助となることを期待しまして序文とします。

平成３年３月

都城市教育長　久味木　福　市

# 例　　言

Ⅰ　本書は，医療法人仁愛会・横山病院による新築工事に伴う，緊急発掘調査の概報である。

Ⅱ　取添遺跡は都城市都原町506番地に所在する。

Ⅲ　発掘調査は都城市教育委員会が実施し，その期間は1990年５月22より開始され，同７月20日をもって終了した。

Ⅳ　出土遺物のうち，舶載陶磁器類・肥前系陶磁器類については，佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏のご助言指導を仰いだ。また土壌（プラントオパール）に関しては，宮崎大学農学部教授藤原宏志氏に委嘱して分析中である。

Ⅴ　本書掲載の写真は遠矢・重永が分担して撮影し，執筆編集は重永がこれに当った。

Ⅵ　出土遺物・記録類は，都城市教育委員会が収納保管して整理中である。

Ⅶ　発掘の調査組織は次のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 調査委託 | 医療法人仁愛会・横山病院 | |
| 調査主体 | 都城市教育委員会 | |
| 調査責任者 | 都城市教育長 | 久味木　福　市 |
| 調査事務局 | 都城市教育委員会 | |
| | 文化課　課　長 | 成竹清光 |
| | 〃　課長補佐 | 遠矢昭夫 |
| | 〃　主事補 | 田部井寿代 |
| 調査担当者 | 都城市文化財専門員 | 重永卓爾 |
| | 調査補助員 | 持永富士男 |

# 都之城取添遺跡発掘調査概報

## 目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査概要 …… 3
　1．確認調査（試掘調査） …… 3
　2．発掘調査 …… 3
　3．層　　序 …… 3
　4．遺　　構 …… 5
　5．遺　　物 …… 7
Ⅲ　ま　と　め …… 9

## 口絵・挿図目次

口絵1　取添遺跡航空写真
口絵2　都之城古絵図の取添部分
口絵3　天目茶碗
口絵4　赤漆片・赤絵皿片・銅製品
口絵5　石造塔婆部分
口絵6　伊集院忠棟・同忠真書状
第1図　取添遺跡周辺の地形図 …… 2
第2図　取添遺跡調査区および遺構分布図 …… 4
第3図　5号土坑（ＳＫ５）平面・断面図 …… 6
第4図　1号竪穴遺構（ＳＣ１）平面・断面図 …… 6
第5図　主な出土遺物 …… 8
第6図　都城縄張り図 …… 11
第7図　伊集院忠棟・忠真文書の封紙・本紙封復元図 …… 12

## 表　　目　　次

表－1　溝状遺構の規模 …… 5
表－2　溝状遺構掘形の諸類型 …… 5
表－3　土坑の規模 …… 6
表－4　出土遺物観察表 …… 7
表－5　日向・薩摩における古城址「取添」一覧表 …… 10

# 図　版　目　次

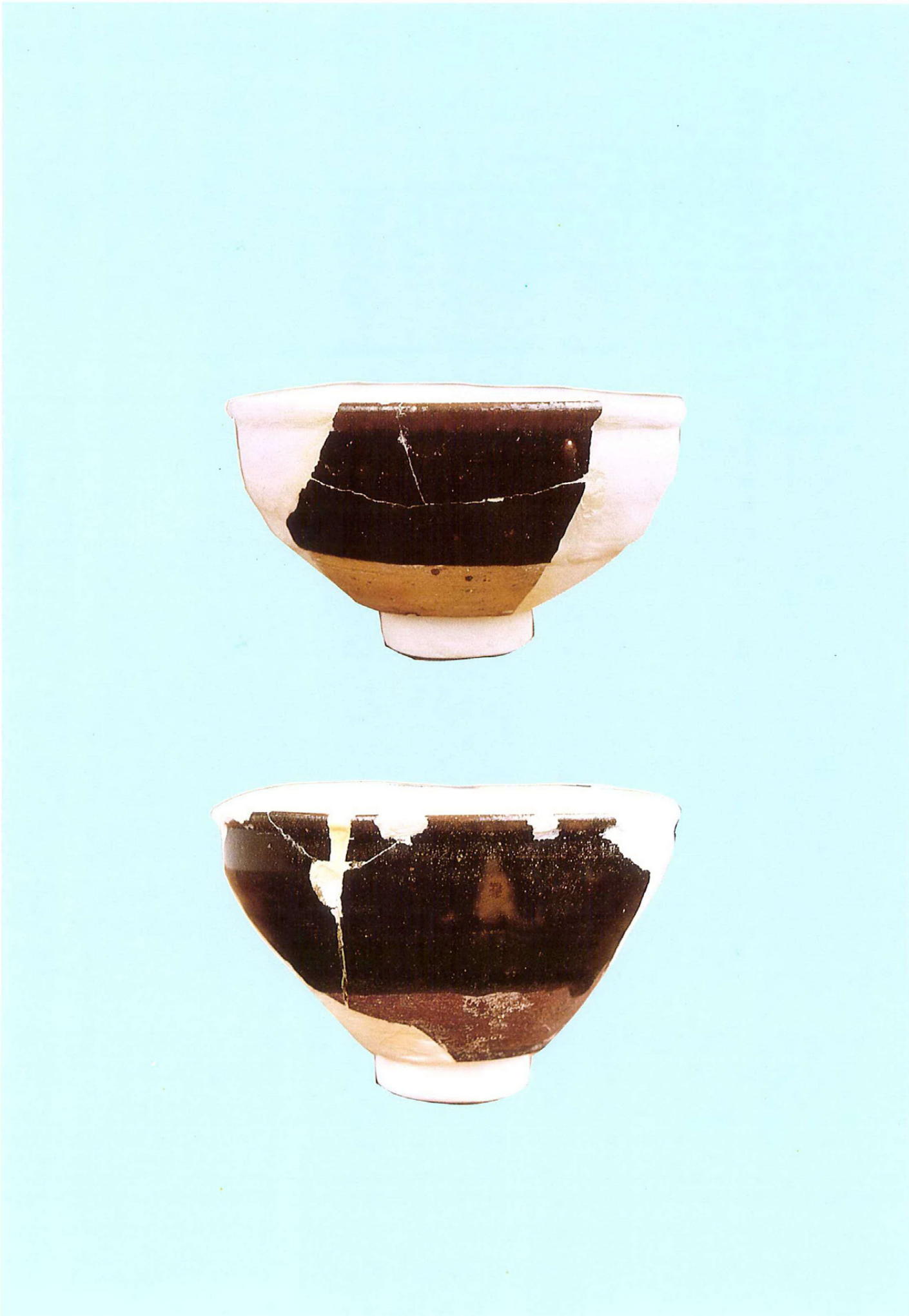
PL. 1　調査区遺構完掘状況航空写真
PL. 2　〃
PL. 3　〃
PL. 4　〃
PL. 5　検出された近世の柱穴列・中世の畝遺構
PL. 6　土坑－5内の集石・1号溝
PL. 7　ピット群の検出状況，竪穴遺構－1
PL. 8　大溝　1・2の切り合い，大溝－2覆土中の板碑
PL. 9　出土遺物　縄文式土器・かわらけ類
PL. 10　〃　舶載磁器（青　磁）
PL. 11　〃　〃　（青　磁）
PL. 12　〃　〃　（白　磁）
PL. 13　〃　〃　（青花文）
PL. 14　〃　〃　（　〃　）
PL. 15　〃　舶載陶器（褐　釉）
PL. 16　〃　陶磁器（中　世）
PL. 17　〃　〃　（近　世）
PL. 18　〃　石製品
PL. 19　〃　るつぼ片・鉄製品

# 附　　録

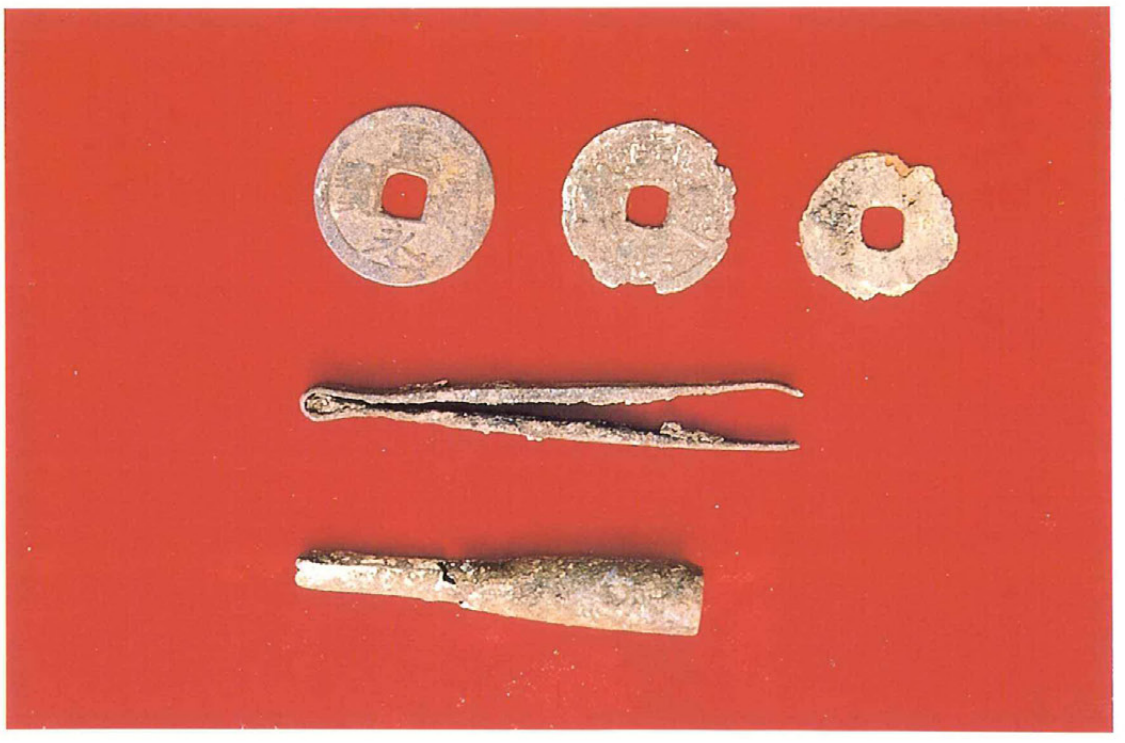
1　伊集院忠棟書状 …… 12
2　伊集院忠真自筆消息 …… 13
3　光明寺本堂定香箱銘写 …… 14
4　光明寺三宝荒神像銘写 …… 14
5　西明寺梵鐘銘写 …… 14

口絵１　取添遺跡航空写真（北側上空より）

**口絵２　都之城古絵図の取添部分**（都城島津家所蔵）

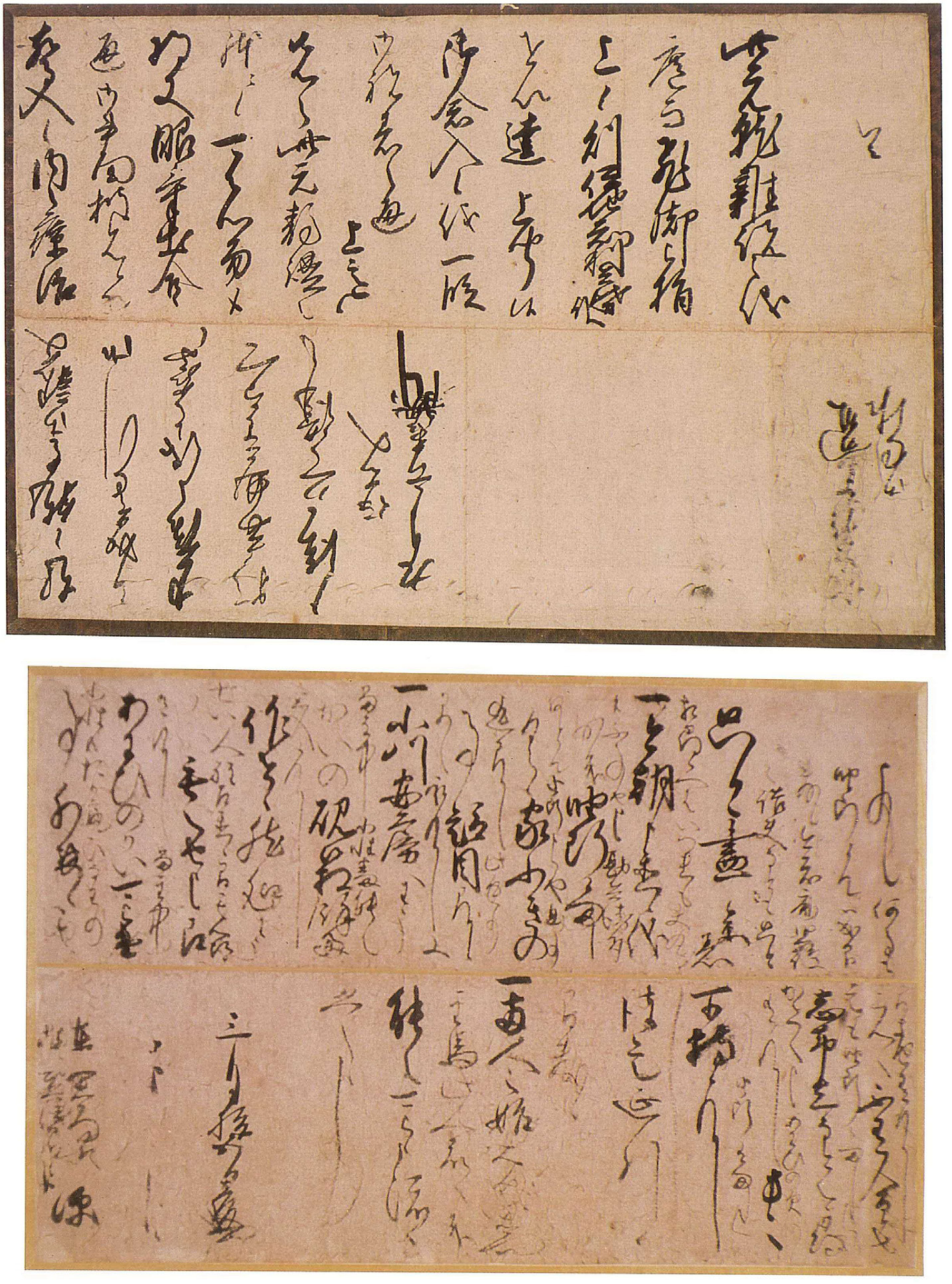


口絵 3　天目茶碗（瀬戸・美濃系）



**口絵 4　赤漆片・赤絵皿片・銅製品**（銭貨・毛抜状製品・煙管吸口）

**口絵 5　石造塔婆**(上：軽石製小板碑，下：五輪の水輪部「水」の墨書あり)



口絵 6　伊集院忠棟書状，同忠真自筆消息（都城島津家所蔵）

# Ⅰ．遺跡の位置と環境

取添遺跡は宮崎県都城市都原町506番地（字，取添）に所在する。当遺跡は都城盆地の東縁，鷹尾・蓑原台地と大淀川の北流する右岸台地の西縁に位置する。この台地と周辺低地との高低差はおよそ23mを計り，標高は161.00～161.70mの間である。

取添は都之城（本丸，曲輪Ⅰ）の北西縁の曲輪を形成する名称で，これは2箇所存在するが，いま便宜，従来調査の曲輪番号に準じて「取添（曲輪XI)」・「取添（曲輪XI')」とする。前者が調査対称の遺跡であり，後者は現在その過半は住宅地となっている。曲輪XI内の北東縁にはかつて稲荷社があり，その下には稲荷池が存在して，近世には都城銘酒「稲荷山」の由来の地でもあった。またその南側には西明寺も建立されていた（註1）。都之城（本丸）を中心として南側には龍峯寺跡（島津家墓地）や竹下橋より西方には，兼喜神社が鎮座するなど，この近辺には都城島津家ゆかりの中世・近世の史跡が多い。

都之城の沿革は一際ならずであり，当初宮丸氏の居館があったという説（註2），都城島津家二代北郷義久が文和元年（1375）創建説（註3）などあるが，何れも確証はない。ただ文和の初年頃に地名・城名としての「都城・都之城」など信憑性の高い資料にはこれが頻出してくる（註4）のが注目される。また文明6年（1474）前後には，都城は島津氏本宗の所領（御料所か）になっていたようである（註5）。降って戦国期天文年間には，十代北郷忠相は盆地統一を達成したが，彼は従来の都之城の城域を拡大整備したと伝承される（註6）。

ともかく当城は南北朝より文献に散見され，守護・戦国大名島津本宗家の北方経略の堡塁としての大きな役割を担った。其後，天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州遠征の際には，北郷時久が籠城戦を展開し，島津氏降伏後の文禄4年（1594）8月には，時久・長千代丸（忠能）は祁答院（宮之城）に改易となり，変わって伊集院忠棟の居城となったが，この伊集院氏時代に取添は構築されたといわれている（註7）。また忠棟が伏見で横死を遂げ，世にいう「庄内合戦」が勃発し，息源次郎忠真が慶長4年（1599）3月より更に本城および十二外城を修築したという（註8）。この事変も翌慶長5年（1600）2月末には終結し，伊集院氏は薩摩国穎娃郡一万石に転封され，其後は北郷氏に旧領が復されたが，元和元年(1615)閏3月徳川幕府の一国一城令に従い，当城は破却され終焉を迎えた（註9）。

註

1　都之城古絵図天和2年写，都城加塩家所蔵。『荘内地理志』巻之二十七。

2　『当家御旧例覚』都城島津家所蔵。『荘内地理志』巻之六十六・六十七。

3　前掲書他。

4　『山田聖栄稿』都城島津家所蔵。

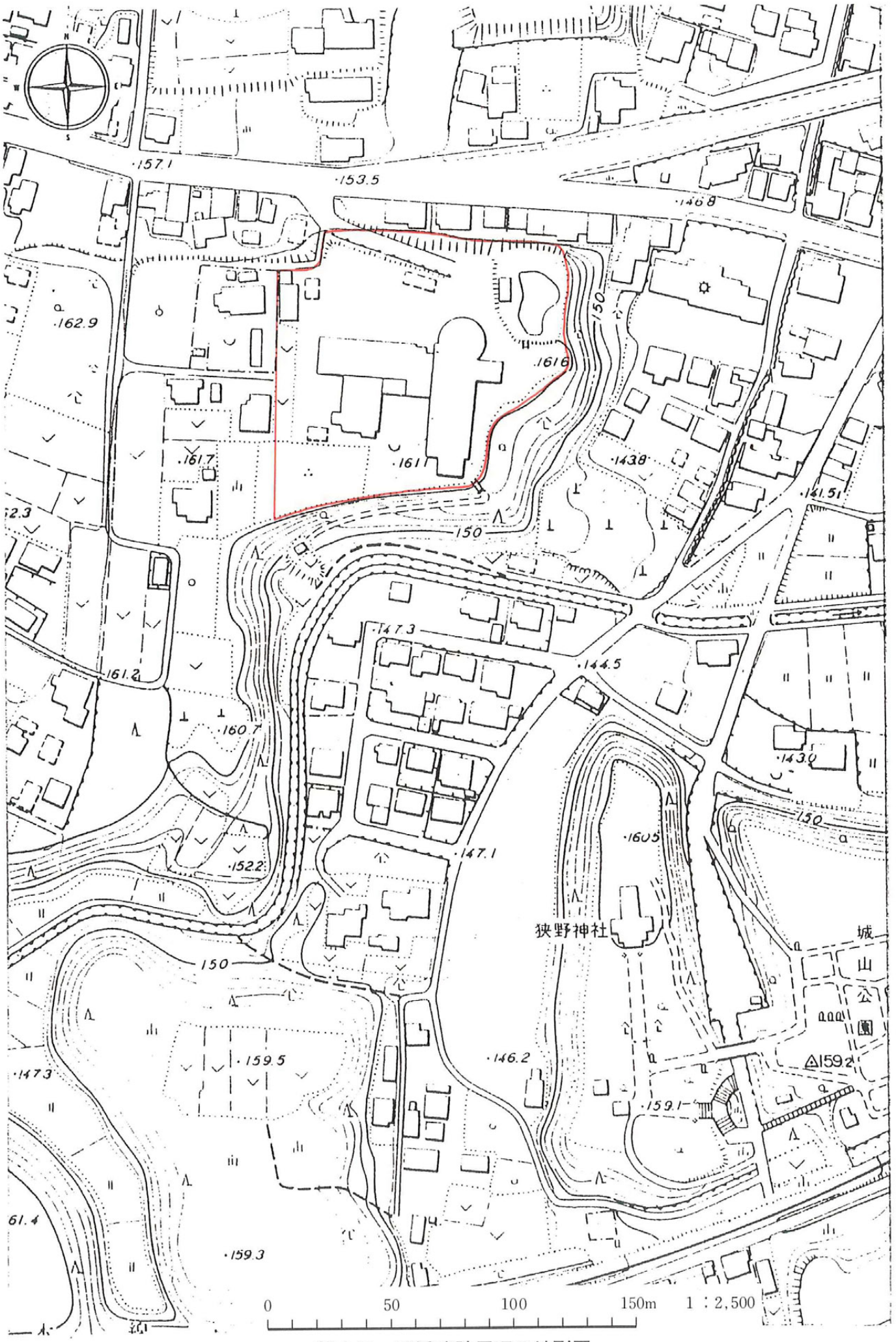
5　『行脚僧雑録』文明六年，都城島津家所蔵。

6　『有田将監記』内題「古物語」，都城島津家所蔵。

7　前掲『当家御旧例覚』他。

8　『島津国史』巻之二十一。

9　註2に同じ。




第１図　取添遺跡周辺の地形図

## Ⅱ．調査概要

**1．確認調査**（試掘調査）平成２年４月，取添遺跡に医療法人仁愛会・横山病院の新築工事（延3,773㎡鉄筋コンクリート２階建）が施工されることとなり，都城市教育委員会では，該地が都之城の１曲輪としての遺跡の重要性にかんがみ，同会の協力を得て，工事に先行して当遺跡の確認調査をすることとなり，同市文化課主事矢部喜多男が，同年４月23日～27日（５日間）試掘調査を実施した。

これは２×２ｍのトレンチ７箇所を設定，第２ＴよりPitや御池ボラ層面に溝状遺構らしきもの，また各Ｔより少量ではあるが14～16Ｃの舶載青花・カワラケ・軽石などを採集したが，旧建造物跡は完全に破壊されていた。しかし周辺部には遺構・遺物検出の可能性があるものと判断し，工事により完全破壊される施工区1,500㎡を，緊急発掘調査（記録保存）し，他の施工区域外は簡易舗装工事のため現状保存の措置をとることに結着した。

**2．発掘調査**

上記の報告に基づき，教育委員会より筆者が発掘調査を委嘱された。調査は平成２年５月22日より開始し，同年７月20日その作業を終了した。

調査区域は既に施工区域の基礎部分に鉄筋が埋設され，水糸が張りめぐらされており，また戦後に建設されたレジャーハイツの跡地でもあり，作業は当初より幾多の困難が予想された。

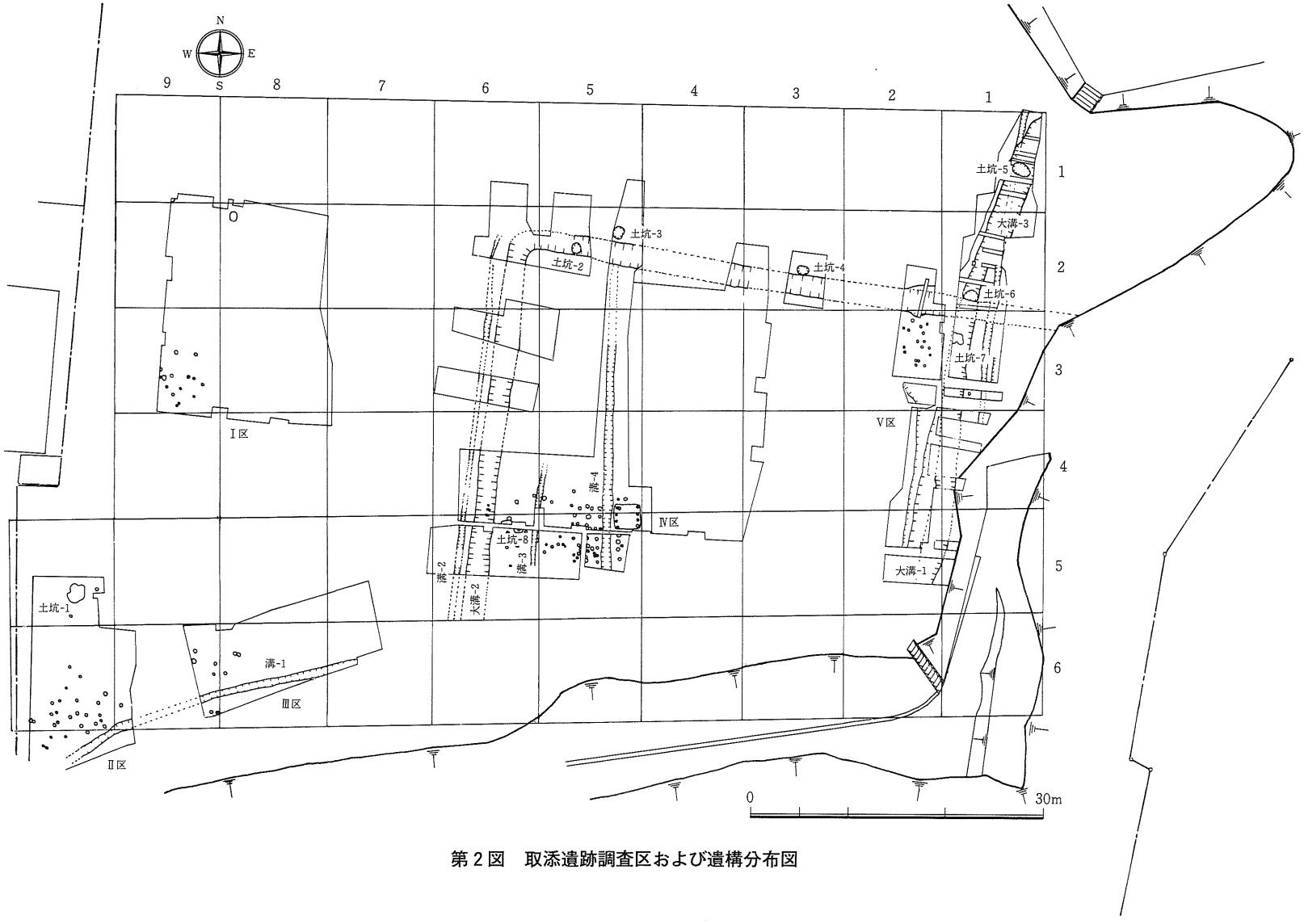
調査は当遺跡調査区の北東端を原点として，方位を磁北線に一致させ，10×10ｍのメッシュに区画するグリッド法とし，原点よりＥ→Ｗ，Ｎ→Ｓにそれぞれ算用数字をもってこれを標示した。

**3．層　序**

当遺跡の層序は，大部分が戦前の陸軍の構築物，および戦後のレジャーハイツなど建造物の残骸や廃棄物の穴などによって大破壊をうけていたが，周辺部の若干の良好な層序は次のようである。

第Ⅰ層：表土（耕土）
第Ⅱ層：白ボラ（文明８年桜島を起源とする降下軽石）
第Ⅲ層：黒褐色腐植砂質土
第Ⅳ層：オレンジパミス混入茶褐色土（漸移）
第Ⅴ層：御池ボラ層
第Ⅵ層：漆黒粘質土層
第Ⅶ層：アカホヤ層
第Ⅷ層：明黒褐色シルト層のごとく堆積して下層に推移する。

遺物の包含層はⅢ層が主で，遺構の確認面はⅤ層御池ボラ層が殆どである。なお調査区は便宜に施工区配置（建設予定地）に従い，Ⅰ～Ⅴ区の五区分とした。




第２図　取添遺跡調査区および遺構分布図

## 4．遺　構

**溝状遺構**（SD，PL．１～４，６～８）

大小７条の遺構が検出された。時期はＡⅠは13Ｃ後半よりＥⅡは16Ｃ代にわたる。要括すると下表のとおりである。

| 遺構No | 規模（m） | | | 検出全長（m） |
|---|---|---|---|---|
| | 上幅 | 底幅 | 深さ | |
| SD１（L）（１号大溝） | 4.23～2.14 | 2.00～1.80 | 1.30 | 28.00 |
| SD１（S）（１号溝） | 0.70～0.63 | 0.40～0.28 | 0.74 | 38.00 |
| SD２（L）（２号大溝） | 2.80～2.30 | 1.00～0.72 | 0.75～1.40 | 80.00 |
| SD２（S）（２号溝） | 0.75～0.53 | 0.43 | 0.30 | 33.50 |
| SD３（L）（３号大溝） | 2.80～2.40 | 0.90～0.67 | 1.65 | 18.00 |
| CSD３（S）（３号溝） | 0.66～0.48 | 0.22～0.20 | 0.41 | 9.00 |
| CSD４（S）（４号溝） | 0.78～0.72 | 0.43～0.41 | 0.52 | 22.00 |

表－１　溝状遺構の規模

| 類 | 型 | 横断面形態模式図 | 特徴 |
|---|---|---|---|
| A | Ⅰ | | SD４（S），埋土はオレンジパミス少混入黒褐色土，滑石製石鍋片，須恵質土器片出土，椀状を呈する。 |
| B | Ⅰ | | SD２（L），SD１（S），北側は道路状，底に双円状の窪み主軸に直交，法肩に小溝が走行，底部，法面，Pit全面，酸化して固い，覆土は同上の上に白ボラ堆積 |
| C | Ⅰ | | SD２（L）の北東部，埋土の中上部に白ボラ堆積東へ行くほどシンプルの白ボラ，底は固く酸化，基底部より法面やや弧を描き立ちあがる。14Ｃ後半～15Ｃのカワラケ・舶載磁器・瀬戸・備前焼の陶器出土 |
| D | Ⅰ | | SD１（L）南部，覆土は混土で中近世の硬化面あり，堀形は椀状で底は硬い，後に嵩あげされて道路状に改変，底面より15Ｃ代のカワラケ・舶載磁器，１面より上は16Ｃ代の同様の遺物出土 |
| | Ⅱ | | CDS３（L）同上，下面より15Ｃ代のカワラケ，１面直下より16Ｃ前半の備前焼など検出。 |
| E | Ⅰ | | SD３（S），填土は白ボラ混入暗褐色土 16Ｃ代の舶載磁器出土 |
| | Ⅱ | | SD１（S），掘形は箱掘状，埋土はオレンジパミス混茶褐色，白色シルト，短時間に埋戻しか16Ｃの舶載磁器出土 |

表－２　溝状遺構堀形の諸類型

**ピット群**（SP，PL．１～5.7）

Ⅰ～Ⅴ区に分布している。このうちⅠ～Ⅲ・Ⅴ区のPitの分布は規距性をせず，覆土はすべてⅡ・Ⅲ層混入のＢタイプで，部分的にはPit（掘形）の基底部が固く，オレンジパミス少混の暗褐色で，軽石を埋置したものも見られる。Ⅳ区のPitは近世・中世（２時期）に分類可能な数棟の掘立柱建物の柱穴掘形と推定される。Pitの填土を分類すると，Ａタイプ：オレンジパミス混入暗褐色土　Ｂタイプ：径２・３㎜の白ボラ混入暗褐色土　Ｃタイプ：白色シルト混入混灰オリーブ色土となる。

**竪穴遺構**（SC１，PL．７）

Ⅳ区のⅤ層上面より１基を確認した。棟の主軸は真北で，2.45×2.31ｍ，深さ0.28～0.40ｍを測る方形プランである。壁下に側溝がめぐり，その幅は0.10～0.14ｍ，深さ0.10ｍを数えるが，東壁下のそれは不明瞭である。柱穴掘形は南北の両壁際に沿って４箇づつ穿たれていた。覆土はオレンジパミス混入の黒褐色土層で３層に分かれるが，Ⅱ層より15Ｃ末の青花蓮子碗の小片１と下層より青磁小片・糸切底でロクロ目痕のカワラケ小片２箇を検出した。

**畝状遺構**（PL．５）

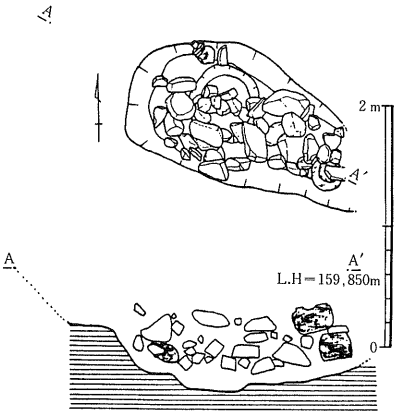
Ⅰ区のⅡ層下より検出された。南北に列状の小溝がほぼ同間隔で走行しており，それには文明白ボラが堆積していた。これは東西14.0ｍ，南北19.0ｍ残存し，中世の畑の畝と推定された。畝幅は0.68～0.78ｍの間隔で小溝の幅は0.3ｍ，深さは0.13～0.14ｍを測る。

**土坑**（SK，PL．6）

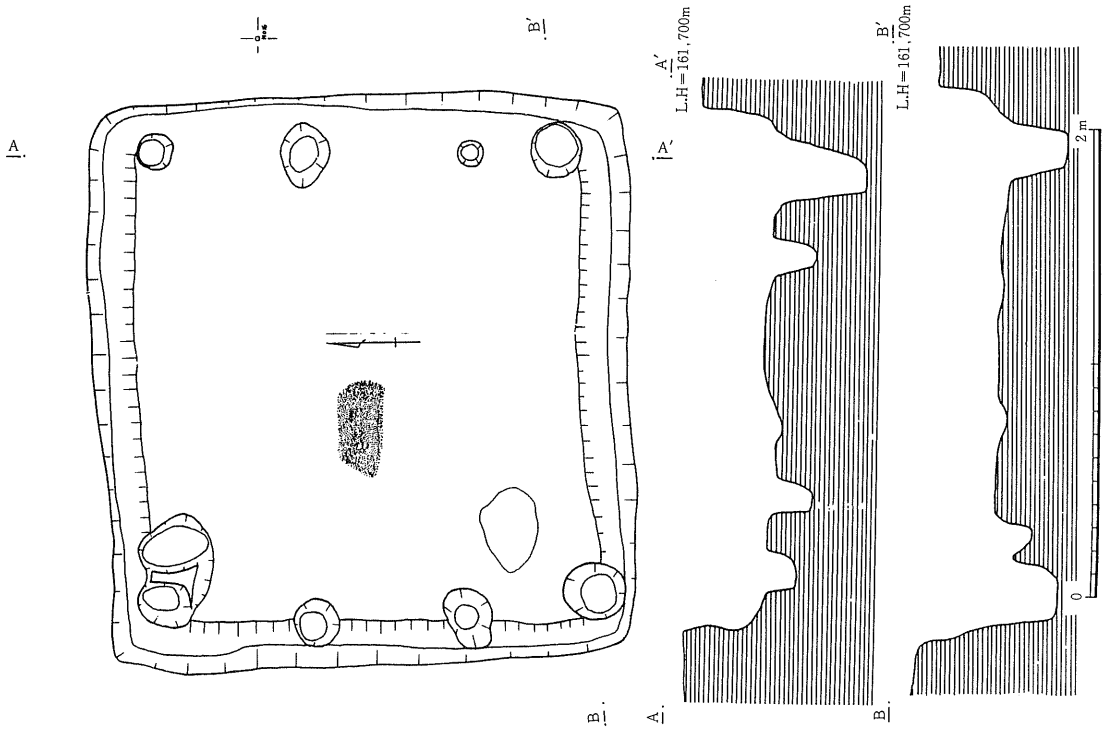
8基を確認した。検出面はⅤ層上面かSD２（L）・SD３（L）などの覆土中である。その殆どに軽石が存在し，填土は白色シラス混入灰オリーブ色土で，それぞれに15Ｃ末～17Ｃ初頭のカワラケ・備前焼擂鉢・舶載青花皿片などが少量づつみい出された。

| 遺構No | 規模（m） | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| | 長径 | 短径 | 深さ | |
| ＳＫ１（１号土坑） | 2.14 | 1.56 | 0.35 | 軽石深部に沈堆 |
| ＳＫ２（２号土坑） | 1.10 | 0.93 | 0.69 | 覆土に軽石<br>青花・擂鉢 |
| ＳＫ３（３号土坑） | 1.07 | 0.88 | 0.48 | 埋土に軽石<br>鉄製品出土 |
| ＳＫ４（４号土坑） | 1.15 | 0.87 | 0.28 | 覆土に軽石 |
| ＳＫ５（５号土坑） | 2.00 | 1.13 | 0.50 | 第１次硬化面を切る　填土に軽石，青花皿，土錘，石製五輪塔の水輪2，風空輪1 |
| ＳＫ６（６号土坑） | 1.15 | 1.35 | 0.63 | 埋土の軽石浮く感じ<br>カワラケ・青花 |
| ＳＫ７（７号土坑） | 1.78 | 0.96 | 0.54 | 覆土に軽石<br>第一次硬化面下 |
| ＳＫ８（８号土坑） | 1.04 | 1.04 | —（未掘） | 覆土に軽石 |

表－３　土坑の規模




第３図　５号土坑（ＳＫ５）平面・断面図




第４図　１号竪穴遺構（ＳＣ１）平面・断面図

## 5. 遺　物

各区包含層・遺構より出土した縄文土器・土師器・須恵質土器・国産陶器・舶載磁器・陶器の主なものを表示すると次のとおりである。

### 土器・陶磁器（PL.　9～16）

| 図版No | 種別 | 器種 | 出土区層遺構 | 測定値(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| PL.9 | 土器 | 甕 | 5-5-Ⅱ | — | — | — | 器内外横位のミガキ | 縄文晩期 |
| ① | 土師器 | 皿 | 3-2 白ボラ下 SD2(L) | 8.1 | 7.3 | 1.8 | 器高低く，内面底盛り上る糸切り底 | 14C後半完形 |
| ② | 〃 | 坏 | 白ボラ下 SD2(L) | — | (7.6) | — | 糸切り底 | 14C後半 |
| ③ | 〃 | 〃 | 1-3 白ボラ上 SD2(L) | — | (6.0) | — | 外面ナデ消シ，糸切り底，糸粗 | 15C |
| ④ | 〃 | 〃 | 1－1 SD3(L) | — | (7.4) | — | 糸切り底 | 15C |
| ⑤ | 〃 | 〃 | 1－2 SK6 | (11.9) | (8.5) | (3.3) | 外面稜あり底部部分的に張る | 15C前半 |
| ⑥ | 〃 | 〃 | 1－1 SD1(L) | (9.8) | (6.7) | (2.6) | 糸切り底 | 硬化面上16C |
| ⑦ | 〃 | 〃 | 1－3 SD1(L) | — | (5.4) | — | 外面稜，煤付着糸切り底 | 16C |
| PL.10 ① | 青磁 | 皿 | 2－5 SD1(L) | — | (6.0) | — | 櫛描文平底露胎 | 12C～13C伝世品？ |
| ② | 〃 | 碗 | 9－6 SD1(S) | — | — | — | 雷文帯釉内貫入 | 14C後半～15C中葉 |
| ③ | 〃 | 〃 | 5－5Ⅱ | (12.4) | — | — | 〃 | 〃 |
| ④ | 〃 | 〃 | 1－4 SD1(L) | (15.2) | — | — | 端反り淡黄茶色 | 〃 |
| ⑤ | 〃 | 〃 | 白ボラ下 SD2(L) | (15.2) | — | — | 淡青色内外釉内貫入 | 〃 |
| ⑥ | 〃 | 〃 | 6－4 SD2(L) | — | — | — | 淡緑色，滑沢 | 〃 |
| ⑦ | 〃 | 盤 | SD2(L) | (26.2) | — | — | 器内，ヘラ描条線 | 〃 |
| ⑧ | 〃 | 皿 | 5－2 SD2(L) | — | (6.4) | — | 見込み釉剝 | 〃 |
| ⑨ | 〃 | 〃 | 2－5 SD2(L) | — | (5.8) | — | 見込みに文様 | 〃 |
| ⑩ | 〃 | 〃 | 2－4 SD1(L) | — | (8.2) | — | 見込み釉剝 | 〃 |
| ⑪ | 〃 | 〃 | 6-5 白ボラ下 SD2(L) | — | 6.0 | — | 見込みに花卉文 | 14C～15C |
| ⑫ | 〃 | 〃 | 6-5 白ボラ下 SD2(L) | — | 5.4 | — | 見込みに双魚文 | 14C末～15C |
| PL.11 ① | 青磁 | 合子 | 8－2Ⅰ | (6.6) | — | — | 淡青色，口造り　無釉 | 明代 |
| ② | 〃 | ？ | 5－5 | — | — | — | 淡黄茶色口縁・体部接合面に布痕 | 〃 |
| ③ | 〃 | 碗 | 5－5 | (13.4) | — | — | 剣先蓮弁文様 | 15C後半～16C中葉 |
| ④ | 〃 | 皿 | 6－4 SD2(L) | — | — | — | 稜花腰皿 | 〃 |
| ⑤ | 〃 | 〃 | Ⅳ区表採 | — | 5.5 | — | 見込みに圏線文様 | 〃 |
| ⑥ | 〃 | 〃 | 10-6 SD1(S) | (9.6) | (4.3) | 2.5 | 菊花形線彫り | 16C |
| ⑦ | 〃 | 鉢？ | 6-3表採 | — | — | — | 淡青白色 | 16C |
| ⑧ | 白磁 | 杯 | 2－2 | (5.2) | (2.6) | 3.9 | 上底 | 16C～17C初頭 |
| ⑨ | 青磁 | 碗 | 5－5Ⅰ | (7.6) | (4.3) | 5.5 | 切高台施釉 | 〃 |
| PL.12 ① | 白磁 | 皿 | 1－4 SD1(L) | — | (4.6) | — | 見込みに目痕切高台露胎 | 15C |
| ② | 〃 | 〃 | 5－2 SD2(L) | (9.7) | 4.5 | 2.8 | 淡黄白色高台一部無施釉 | 15C　福建 |
| ③ | 〃 | 〃 | 5－5Ⅰ | — | — | — | 端反り灰白色 | 15C末～16C中葉 |
| ④ | 〃 | 〃 | 10－5 SK1 | (11.2) | — | — | 〃 器内外貫入 | 〃 |
| ⑤ | 〃 | 〃 | 10－7 SD1(S) | — | (6.8) | — | 高台無釉 | 〃 |

| 図版No | 種別 | 器種 | 出土区層遺構 | 測定値(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| PL.12 ⑥ | 白磁 | 杯 | 9－3 | — | — | — | 端反り | 16C |
| ⑦ | 〃 | 碗 | 6－3 SD2(L) | — | — | — | 〃 | 16C |
| ⑧ | 〃 | 皿 | 1－3 SD1(L) | 11.4 | 6.5 | 3.0 | 灰白色粗製，底糊穀痕 | 16C |
| ⑨ | 〃 | 〃 | 2－4 SD1(L) | (11.8) | (6.0) | 3.6 | 端反り | 15C末～16C後半景徳鎮窯 |
| ⑩ | 〃 | 〃 | 10－5 SK1 | (11.0) | (2.8) | 3.1 | 碁笥底 | 16C後半～17C初頭 |
| PL.13 ① | 青花 | 碗 | 1－4 SD1(L) | (13.6) | — | — | 端反り，二重圏線下に花卉文様 | 15C景徳鎮窯 |
| ② | 〃 | 盤 | 7－6 | — | (29.8) | — | 高台露胎 | 15C景徳鎮窯 |
| ③ | 〃 | 碗 | 10－5 SK1 | (13.5) | (4.9) | 5.1 | 蓮子碗，花散文 | 15C末～16C中葉景徳鎮窯 |
| ④ | 〃 | 〃 | 1－3 SD1(L) | (14.3) | (4.6) | 7.6 | 口縁下に波濤文，下面に芭蕉文，見込みに蓮花文 | 16前半～中葉景徳鎮 |
| PL.14 ① | 青花 | 皿 | 2－3 SD1(L) | (9.4) | — | — | 外面魚文，器内口縁下二条，見込み二重圏線 | 16C |
| ② | 〃 | 〃 | 2－3 SD1(L) | — | — | — | 淡茶色 | 16C |
| ③ | 〃 | 〃 | 8－3 | — | — | — | 灰オリーブ器内外貫入 | 16C |
| ④ | 〃 | 〃 | SD3(L) | (8.5) | — | — | 淡茶色見込み，体部下面無施釉 | 16C |
| ⑤ | 〃 | 〃 | 1－1 SK5 | (9.5) | (4.0) | 2.6 | 見込み圏線内菊花文碁笥底 | 16C後半 |
| ⑥ | 〃 | 碗 | 10－5 SK1 | — | — | — | 口縁下見込みに一条の圏線 | 16C中葉～17C初頭福建 |
| ⑦ | 〃 | 〃 | 1－4 SD1(L) | (10.9) | — | — | 器内外に少し鉄奨泥 | 16C中葉～17C初頭 |
| ⑧ | 〃 | 〃 | 8－5 | — | — | — | 器外二重圏線下に社丹文 | 16C後半～17C初頭 |
| ⑨ | 〃 | 盤 | 2－3 SD1(L) | — | (19.5) | — | 呉須手 | 〃 広東 |
| 口絵 4 | 磁器 | 皿 | 5－5Ⅲ | — | (11.2) | — | 赤絵皿，見込み3重圏線，高台上部二重圏線 | 16C前半・中葉 |
| PL.15 ① | 陶器 | 壺 | SD3(L) | — | — | — | 皿耳壺か褐釉 | 明代 |
| ② | 〃 | 甕 | 2－3 SD1(L) | — | — | — | 褐釉外面茶褐色，滑沢 | ②③④は同一個体か |
| ③ | 〃 | 〃 | 2－3 SD1(L) | — | — | — | 褐釉器内橙褐色 | 〃 |
| ④ | 〃 | 〃 | SD1(L) | — | — | — | 〃 | 〃 |
| ⑤ | 〃 | ？ | 8－6 SD1(S) | — | — | — | 褐釉器内外黒褐色 | 陶片を遊具などに転用か |
| PL.16 ① | 陶器 | ？ | 5－5 SD4 | — | — | — | 須恵質器外面平行タタキ | 13C後半 |
| ② | 〃 | 擂鉢 | 6－3 SD2(L) | — | — | — | 口縁・片口部 | 備前焼15C |
| ③ | 〃 | 〃 | 6－3 SD2(L) | — | — | — | 底部 | 〃 |
| ④ | 〃 | 甕 | SD2(L) | — | — | — | 肩部に条線 | 〃 |
| ⑤ | 〃 | 〃 | 10－5 SK1 | — | — | — | 内外面，横位のナデ | 〃 |
| ⑥ | 〃 | 〃 | 6－3 SD2(L) | — | — | — | 底部，器内面に鉱滓膠着 | 〃 |
| ⑦ | 〃 | 擂鉢 | 5－2 SK2 | 27.5 | 13.6 | 12.4 | 内面に8本1単位の縦位の擂目 | 16C備前焼 |
| 口絵 3 | 〃 | 茶碗 | 5－2 | (11.2) | (3.8) | (6.5) | 天目茶碗体部下無施釉 | 16C瀬戸・美濃系 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 9－3 Pit | (11.4) | (4.0) | (7.2) | 天目茶碗鉄奨泥 | 〃 |

表－4　出土遺物観察表

この他，掲載できなかった陶磁器に，舶載の褐釉陶器２片が10－５区（ＳＫ１）より検出。これは東南アジア方面で焼かれた可能性がある。また近世磁器では，肥前系の皿などで18Ｃ～19Ｃ前半のもの，18Ｃ後半～19Ｃ初頭のソバチヨコ，近世後期の薩摩系の陶器類などが少量出土している。鍛冶・鋳物に関係する遺物として，るつぼ（PL. 19）が僅かであるがＳＫ１のⅠ層より出土しており，これには鉱滓が膠着している。その他の土製品では，ＳＫ５より紡錘状の土錘４，その周辺より１の計５箇が採集された。

**石製品**（PL. 18）

滑石製の石鍋小片（SD４（Ｓ），PL.18）や手砥石類（PL.18）がＳＤ１（Ｌ）－２（Ｌ）より検出された。材質は砂岩・頁岩・硅石など多様である。この他に，ＳＤ２（Ｌ）下層より軽石製の板碑残欠部，ＳＤ３（Ｌ）１次硬化面より同じく軽石製のミニ板碑（口絵５）や宝珠２が出土。ＳＫ５覆土内より凝灰岩製の五輪塔の水輪部が１箇（口絵５），同材質の宝塔を思われる塔身（あるいは五輪塔の変形か）１を検出した。これらはそれぞれ年代差があるが，それについては本報告に委ね，一応前者は14Ｃ後半頃，後者は16Ｃ前半頃と推定しておきたい。

**鉄製品**（PL. 19）

巻頭釘，武器では鉄鏃（２－３区）・小刀（10－６区Pit内）・鉄製紡錘車（５－２区）などが検出されている。

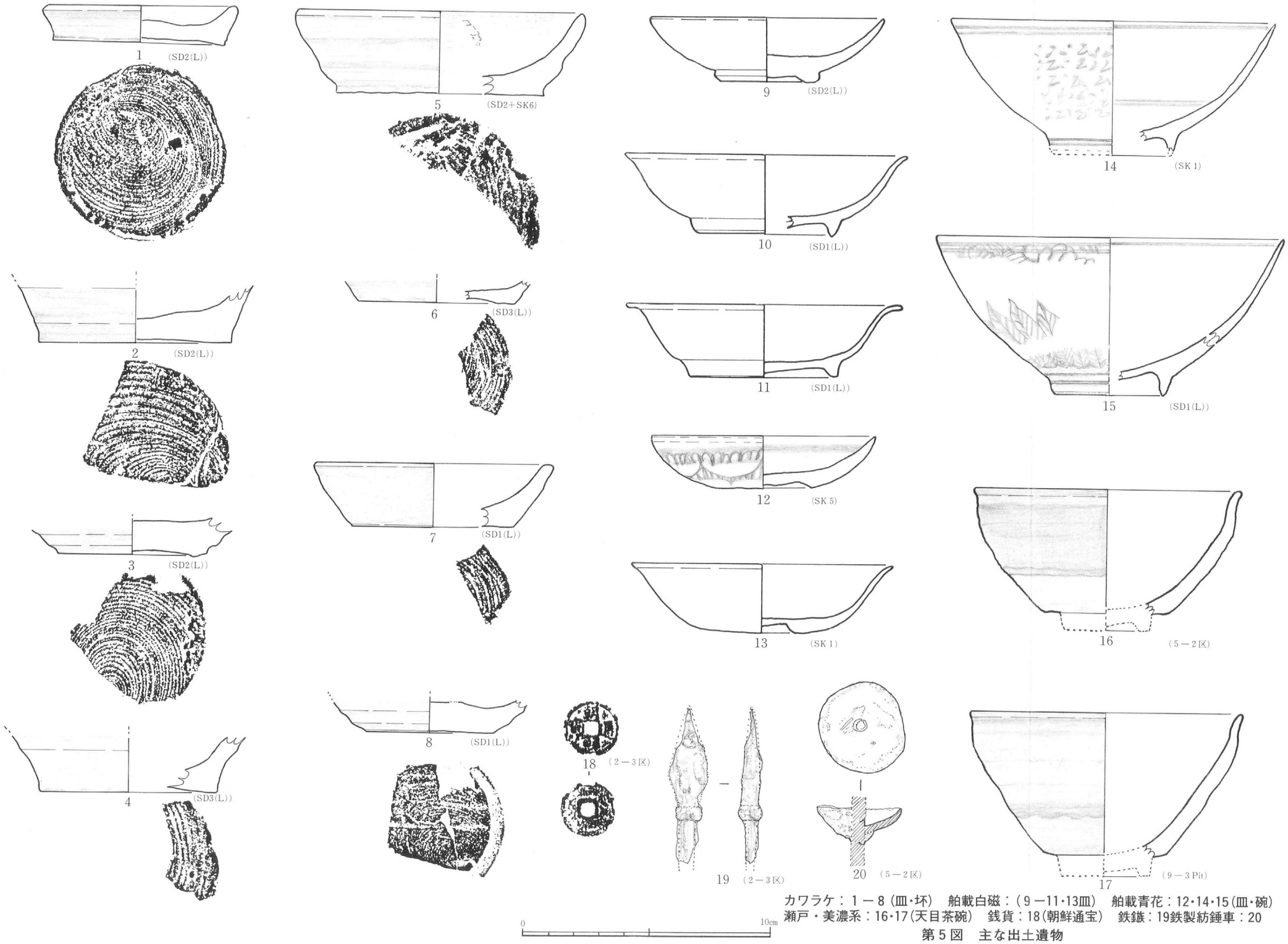
**銅製品**（口絵４）

煙管の吸口・寛永通宝（以上Ⅳ区－Ⅰ層）・朝鮮通宝（２－３区）・鋳文不明の銭貨,また５－５区Ⅱ下層よりピンセット状のものがみい出されている。

その他の遺物

**赤漆片**（口絵４）

ＳＤ３（Ｌ）の１次硬化面下の覆土より出土した。これは赤塗椀のものが剝落したものと思われる。




カワラケ：1－8（皿・坏）　舶載白磁：（9－11・13皿）　舶載青花：12・14・15（皿・碗）
瀬戸・美濃系：16・17（天目茶碗）　銭貨：18（朝鮮通宝）　鉄鏃：19鉄製紡錘車：20

第5図　主な出土遺物

## Ⅲ. ま と め

当台地は縄文晩期の土器片・古墳時代の土師器片の出土によって，該期のその利用の徴証をえた。その立地が重要視されるのは，むしろ中世に入ってからであろう。以下，不十分ながら検出した遺構・遺物によって，中世を主眼とするおおよその時期の設定を試みることにしたい。

第Ⅰ期　南北に走行するＳＤ４は埋土や出土遺物より13Ｃ末頃のものとみたい。またこれとほぼ同時期と推定されるＳＤ２（Ｌ），ＳＤ２（Ｓ）は，当初はセットとして開削され，前者は道路，後者はそれに附属する溝であったと推定する。14Ｃ後半になるとＳＤ２（Ｌ）は溝状に改変されたごとくで，これ以前は道路として機能していたものであろう。

第Ⅱ期　ＳＤ２（Ｌ）は約2,000㎡を内区とするＬ字状に囲繞された館址の堀として掘削されたようで，これと同時期と推定される遺構は，Ⅳ区Ａタイプ填土のPit群（掘立柱建物の掘形）やＳＣ１であろう。

これらは文明８年（1476）秋の桜島噴火以前は廃絶していたように推察される。ただ畝状遺構の文明白ボラの堆積状況より観れば，この畑はこの直後に廃棄されたものといえよう。

第Ⅳ期　それ以後にＳＤ１（Ｌ）・ＳＤ３（Ｌ）が開削されたようである。これはとりあえず15Ｃ代としておくが，16Ｃ前半には埋め戻されたものと思われる。

第Ⅴ期　ＳＤ１（Ｌ）・ＳＤ３（Ｌ）は16Ｃ末になると，南東縁の虎口と推定される部分より，その通路として嵩あげ改変を加えた形跡がある。この時期の他の遺構は，Ⅰ～Ⅴ区のＢタイプ覆土のPit群（Ⅵ区は掘立柱建物）・ＳＤ３（Ｓ）がある。これとほぼ同年代，さらに台地の周縁を囲い込むようにＳＤ１（Ｓ）が掘削されているが，これは間もなく埋め戻されている。

これ以降にⅣ区の白色シルトを混ずる掘形（掘立柱建物）が作事されたごとくで，これはその埋土・遺物より17Ｃ代と推察される。これよりややあって，18Ｃ～19Ｃの肥前系磁器・在地系陶器が確認されるので，この間にＳＫも営まれたのであろう。

歴史的にみれば，当地に軍事的，政治的緊張のもっとも高まった永和初年に，「都之城」・「都城」の名称が文献に頻出する（註１）。この事実と第Ⅱ期が符合する点は見逃せない。またこの形態は該期南九州の城館の一端を伝えるものとして貴重であろう。さらに第Ⅳ期は戦国期の虎口の改変と関連があろうし，Ⅴ期は文禄４年（1595）９月？～慶長５年（1600）２月伊集院氏時代にそれぞれ対応するもの（註２）であり，それ以降の掘建柱遺構は，元和元年（1615）閏６月の徳川幕府の一国一城令直前の，北郷氏家臣団の一つの存在形態を示すものであろう（註３）。

都之城の一郭の「取添」はつとに伊集院氏の構築と伝承されるが，この名称が南九州に普遍的であったかどうか詳かでないが，伊集院氏ゆかりの城址に多存している事実は興味深い。

「取添」はおそらく「取り添ふ」の意から出たものであろう。そして「今拵」・「新城」などという名称とは本来は区別さるべき曲輪名であったものと思われる。古城址に附属する取添は多く本郭部を防禦するため，台地の辺縁部に新規に構築されたものと考えてよい。外掘の未発達の場合，特に有効であったろう。都之城の場合も本丸の北西縁部に位置する。これは本郭部と「弓場田口」・「鷹尾口」

の防衛を第一義としながらも，伊集院氏の行政機構の拡大や，豊臣政権の地方への権力誇示にも関わっていよう。この事実は本郭部の布堀り・五七桐紋瓦の出土，取添のＬ字外郭の構成など，それを如実に示している。

因みに，天和古絵図に描かれている「西明寺」は，該地に創建されていたように伝承されるが，北郷義久都之城築城説と共に疑問がある（註４）。また同じく「稲荷社」は北郷忠相が天文年間に祭祀したものと伝えられる（註５）。

ともかく今後，当城の有するであろう複雑な性格，機能など歴史考古学はもとより，文献史学の面よりもアプローチし，しかるべき位置づけがなされることを期待したい。

いつも思うことであるが，城郭調査などのように周辺部の巨大遺構の追求と，その安全対策が切望される。最後に本調査に際し，格別のご高配を賜った　　，また貴重な関連史料のご提供を頂いた　　に衷心より感謝申し上げたい。また酷暑のみぎり額に汗して発掘作業にご協力を惜しまなかった方々の労を多としたい。

| No | 城　名（別称） | 中世行政区 | 曲　輪　名 | 郭数 | 本郭部よりの方位 | 出　　典 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 都之城（鶴丸城） | 日向南郷 | 取　添 | 2 | 北西縁 | 加塩家所蔵<br>天和２年古絵図 | 本城<br>伝伊集院氏構築 |
| 2 | 山田城 | 日向北郷 | 取　添 | 1 | 南西縁 | 荘内地理志巻之八十四 | 庄内十二外城 |
| 3 | 安永城（鶴翼城） | 日向北郷 | 取　添 | 1 | 北東縁 | 荘内地理志巻之七十四 | 庄内十二外城 |
| 4 | 梶山城（雄鷹城） | 日向三俣院 | 取そへ<br>（とりそへ） | 1 | 北東縁 | 荘内地理志巻之九十九 | 庄内十二外城 |
| 5 | 月山日和城（高城） | 日向三俣院 | 取　添 | 1 | —— | 三国名勝図会巻之五十七 | 庄内十二外城 |
| 6 | 龍虎城（北俣城） | 日向財部郷<br>大隅財部院 | 鳥　添 | 1 | 南西縁 | 財部町郷土史 | 庄内十二外城<br>財部城 |
| 7 | 亀鶴城（松尾城） | 日向南郷<br>大隅深河院 | 取　添 | 1 | —— | 三国名勝図会巻之三十六 | 庄内十二外城<br>末吉城 |
| 8 | 亀鶴城（鹿屋城？） | 大隅鹿屋院 | 取添城 | 1 | —— | 三国名勝図会巻之四十七 | 伝伊集院忠棟構築 |
| 9 | 松ケ城（高原城？） | 日向諸県郡 | 取添丸 | 1 | —— | 三国名勝図会巻之五十六 | |

表－５　日向・薩摩における古城址「取添」一覧表

註

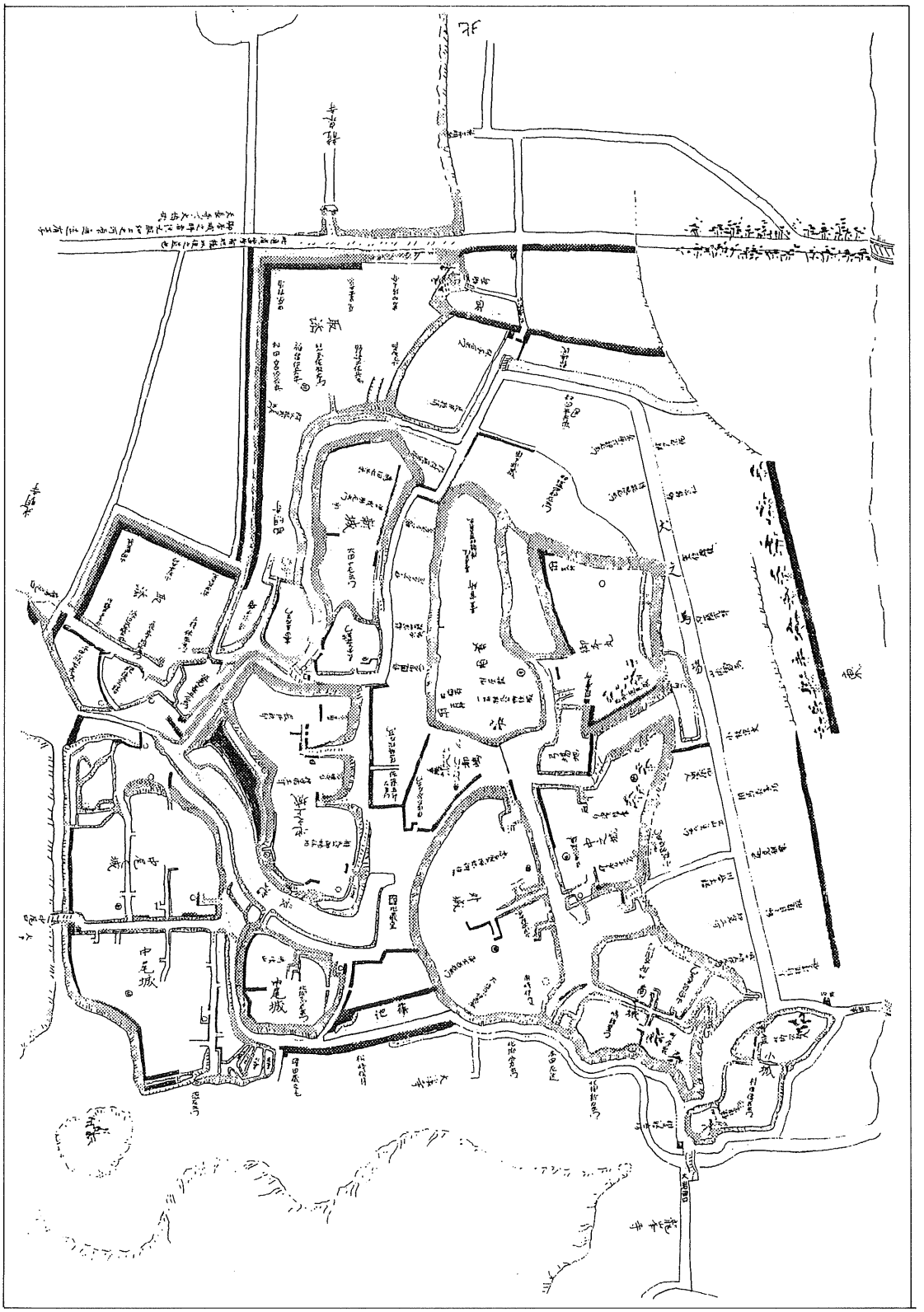
1　『山田聖栄自記』・『土持文書』他。

2　『島津國史』巻之二十一。拙編『都城島津家史料』第三巻。拙稿「伊集院忠真受発給文書にみる庄内事変の一齣」（『南九州文化』18～20）。

3　天和２年『都之城古絵図』都城加塩家所蔵。この絵図については，拙稿「日向国庄内に於ける中世城郭について」（『南九州文化』29）。

4　『荘内地理志』巻之四。附録の解説参照。

5　前掲書。




**第6図　都之城縄張り図**(天和2年写, 加塩家所蔵本に依り新規に作図したものである)

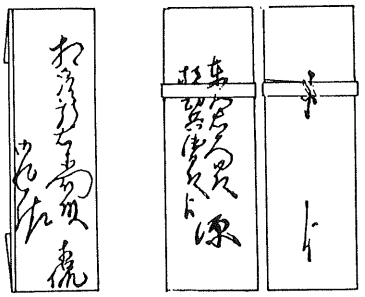
## 〔附　録〕

### 1　伊集院忠棟書状（口絵６）

〔白　文〕

此元就雑説之儀
遮而飛脚被指
上候則伊地知利兵衛尉殿
を以達　上聞候
御念入候儀一段
御祝着之通上意候
先々此元静謐之
躰ニ候可御心易候
将又眼気出合候
通御書面披見候而
驚入候内々療治
尤候就者御親父
被成遠行御
力落之儀令察候
猶委曲重而可
申談候恐々謹言
　九月六日幸侃（花押）

□□□右衛門尉殿
　　御返報



（表）　（表）　（裏）

**第７図　１号懸紙復元図　　２号文書本紙切封復元図**

〔読み下し〕

ここ元雑説の儀，遮而飛脚指し上され候。すなわち伊地知利兵衛尉殿をもって上聞に達し候。ご念入候ふ儀，一段ご祝着の通，上意に候。先ずず々，ここ元静謐の体に候。御心やすかるべく候。はたまた，眼気出合候ふ通り，御書面披見候ふて驚き入り候。内々療治もっともに候。ついては，御親父遠行なされ，お力落しの儀，察せしめ候。なお委曲は重ねて申し談ずべく候。恐々謹言。

　　伊右入（伊集院右衛門大夫入道）
　九月六日幸侃
　□（相）□（良）□（新）右衛門尉殿
　　御返報

〔解　説〕

この書状は某年の９月６日付で，忠棟より相良新右衛門尉に充てた返事である。口訳すると，こちらの風聞のことで，わざわざ使者を遣わされましたので，すぐさま伊地知利兵衛殿をして主君にご報告しました。ご念の入ったこと格別に祝着に思うぞとのお言葉でした。当方は何事もなくご安心下さい。それにしても，眼病に罹られたとのこと，お手紙を拝見して驚いています。うちわに治療なされることが大切です。また御親父様が死去されたとのこと，落胆のほどお察しします。なお詳細は重ねて相談いたしたい。という意味であろう。忠棟の入道は天正15年（1587）６月であるから，本書もそれ以後のものとなる。或いは上洛中の島津義久へ御使役の相良長泰からの連絡と思われ，忠棟の島津家宿老としての一面を伝える。

本書の料紙は楮紙（奉書）で，折紙となっており，祐筆書きである。なお懸紙（封紙）は既に失われている。

## 2　伊集院忠真自筆消息（口絵６）

〔白　文〕

猶々何事も
油断候てハ成間
敷候今度鹿児嶋
之詰夫なとも只今
只今晝参着候
相尋候へ者いつれも夫丸
一今朝申置候儀
共不事由申候勘兵衛尉
少茂油断候まし
何とて油断申候や曲事
く候家ふきの
迄候へく候此返事
事題目申へく候
早々承べく候又
一小川安房へわう
留主中小性番能々
かいの硯箱餘多
念入候へく候
作せ候然処わう
七八人程召置候間其心得
かい無之由申候即
有へく候留主中
あわひのかい可被遣
小性共たか尻ひなわの
之事肝要候其
つちきセ有へく候
元へ不有合候者
是も油断候ましく候
志布志なとを尋
かたく申候あわひの貝の
有へく候方々
事由断有ましく
所持候へく候
候
彼是延引候

間敷候
一両人之姫大介八右衛門尉
主馬此人衆へ茂能々可被申渡候
恐々かしく

三月拾五日忠（花押）

より

東□□右衛門尉殿　源
□□□兵衛尉殿　江

〔読み下し〕

ただいま参着候。今朝申し置き候ふ儀，少しも油断候ふましく候。家ふきのこと題目申すべく候。
一つ，小川安房へわうかいの硯箱あまた作らせ候。しかるところ，わう貝これなきよし申し候。すなわち，あわびのかい遣わさるべきのこと，肝要に候。其元へありあわず候はば，志布志などを尋ねあるべく候。方々所持候べく候。かれこれ延引候ふまじく候。
一つ，両人の姫・大介・八右衛門尉・主馬この人衆へもよく々申し渡さるべく候。恐々かしく。
（追而書）
なお々，何事も油断候ふてはなるまじく候。今度，鹿児島の詰夫などもただいま相尋ね候へば，いづれも夫丸ども不事（ぶじ）のよし申し候。勘兵衛尉何とて油断申し候や。曲事（くせごと）迄候べく候。この返事早々うけたまわるべく候。また留守中小姓番よく々念を入れ候べく候。七八人程召し置き候ふあいだ，その心得有るべく候。留守中小姓どもたか尻・ひなわのつちきせ有べく候。是も油断候ふまじく候。かたく申し候ふあわびの貝のこと，油断有まじく候。

（真）
三月拾五日忠（花押）

より

（彦ヵ）
東□□右衛門尉殿　（源次郎）
（猪ヵ）（勘ヵ）　源
□□□兵衛尉殿
（切封の紐痕）　江

〔解　説〕

この手紙も年紀不詳であるが，某年の３月15日に忠真よりごく身内の東郷彦右衛門尉・猪俣勘兵衛尉（以上は推定）の両名に充てたものである。内容は，ついいましがた到着した。今朝も申し付けておいたように，少しも注意をおこたってはならぬ。家葺の一々はまた連絡する。１．小川安房へ大貝の硯箱をたくさん注文したが，大貝が不足すると申してきている。だから鮑を届けることが大切だ。そちらで入手できなければ，志布志あたりで求め持参するがよい。何かと延引してはならぬぞ。

２．２人の姫や大介・八右衛門・主馬なども手落ちのないよう十分に申し渡すように。とにかく何事も注意を怠ってはいけない。こんど，鹿児島詰夫のことも，いま訪ねてみれば，人夫どもは仕事をさぼっているというではないか。勘兵衛は何をしているのか。とんでもないことだぞ。この件に関しては早々に聞きたい。また留守中の小姓どもは番を入念にするがよい。７，８人もめしおいてあるので，その心得でいるように。また留守中小姓どもはたか尻（竹尻＝鏃か）・火縄の手入れも致しておくよう。これもぬかりがあってはならぬ。また先ほどきっと申し付けた鮑のこと，なおざりにしてはあいならぬぞ。という意である。

本文書は楮紙（奉書）を使用し，折紙形式，礼紙を切放ち封にしてあり，封紙（懸紙）は既にない。珍しい忠真の自筆長文の書状で興味つきないものがある。従来，彼の武勇の反面，つまり非常に繊細な性格が紙面より伝わってくるようだ。花押形態より都城時代のものと推定しておきたい。

### 3　光明寺本堂定香箱銘写（荘内地理志巻之七十一）

伊集院右衛門大夫忠棟，爰許御知行之砌，為蓮仏房牌処再興畢
　皆文禄五年丙申閏七月廿八日，光明寺三代覚阿（下略）

〔解　説〕

伊集院忠棟が当地時宗の光明寺の牌所を再興したこと，また同寺境内の三宝荒神像を造立した事実を知る。伊集院忠棟一族関係の史料は殆ど抹殺されているので稀有なものといえ，これによってまた大名による寺院政策の一端も窺知されよう。

### 4　光明寺三宝荒神像銘写（荘内地理志巻之七十一）

日州諸縣郡都城大林山光明寺住持，三代覚阿，作者漢弥〔阿脱カ〕，奉建立
南無三宝大荒神御尊像
大檀那藤原朝臣伊集院右衛門大夫入道忠棟
　于時文禄四年己未十一月廿八日

### 5　西明寺梵鐘銘写（荘内地理志巻之四）

謹奉捨入
日本嶋津庄日州北郷大同山西明禅寺常住
　右志趣者，為天長地久，御願圓満，文殊大士
　為道旦恵有頓證佛果菩提
　次願主住持比丘祐奕
　　保祐，本寺且那知久，
　心中所願皆令満足，
　　應永念三年丙申九月吉日

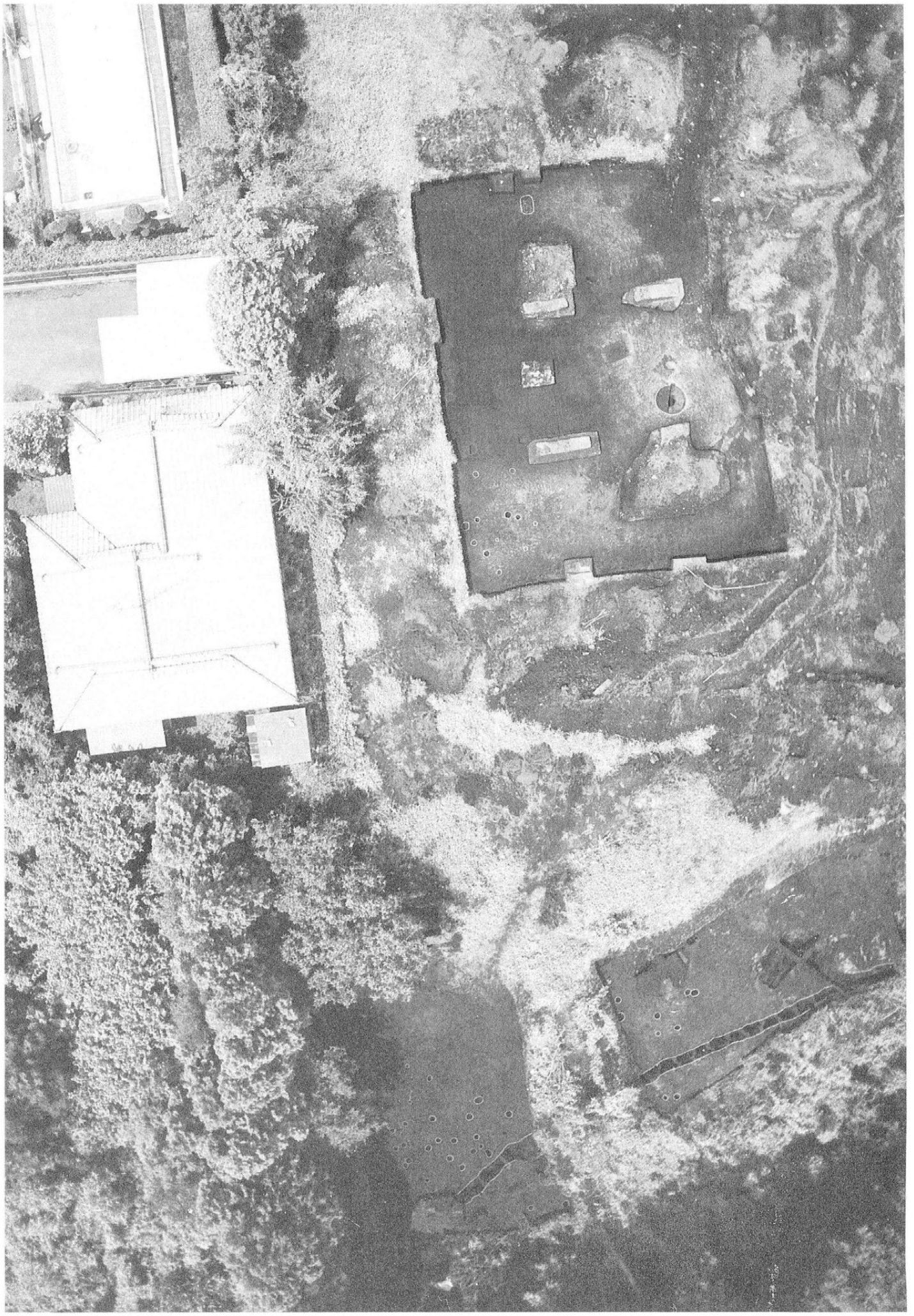
〔解　説〕

この銘文の主体は不明であるが，一応梵鐘銘と推定しておく。これは近世まで薩摩国日置郡市来の龍雲寺に所在したごとくである。

これは応永23年（1416）９月某日，道旦恵有の追善供養のため，西明寺住職の祐奕らが願主となり，知久が檀那となって，併せて施主らの心中所願を成就せしめんがために施入したものである。

ここで注目すべきは，西明寺の所在が北郷とみえることであろう。従来，西明寺は創建時より都之城取添に所在していたように伝承されるが，中世該期の都之城は南郷に属していた筈である。ところで，ここに見える「道旦恵有」とは誰か。それは次の史料が証明してくれる。

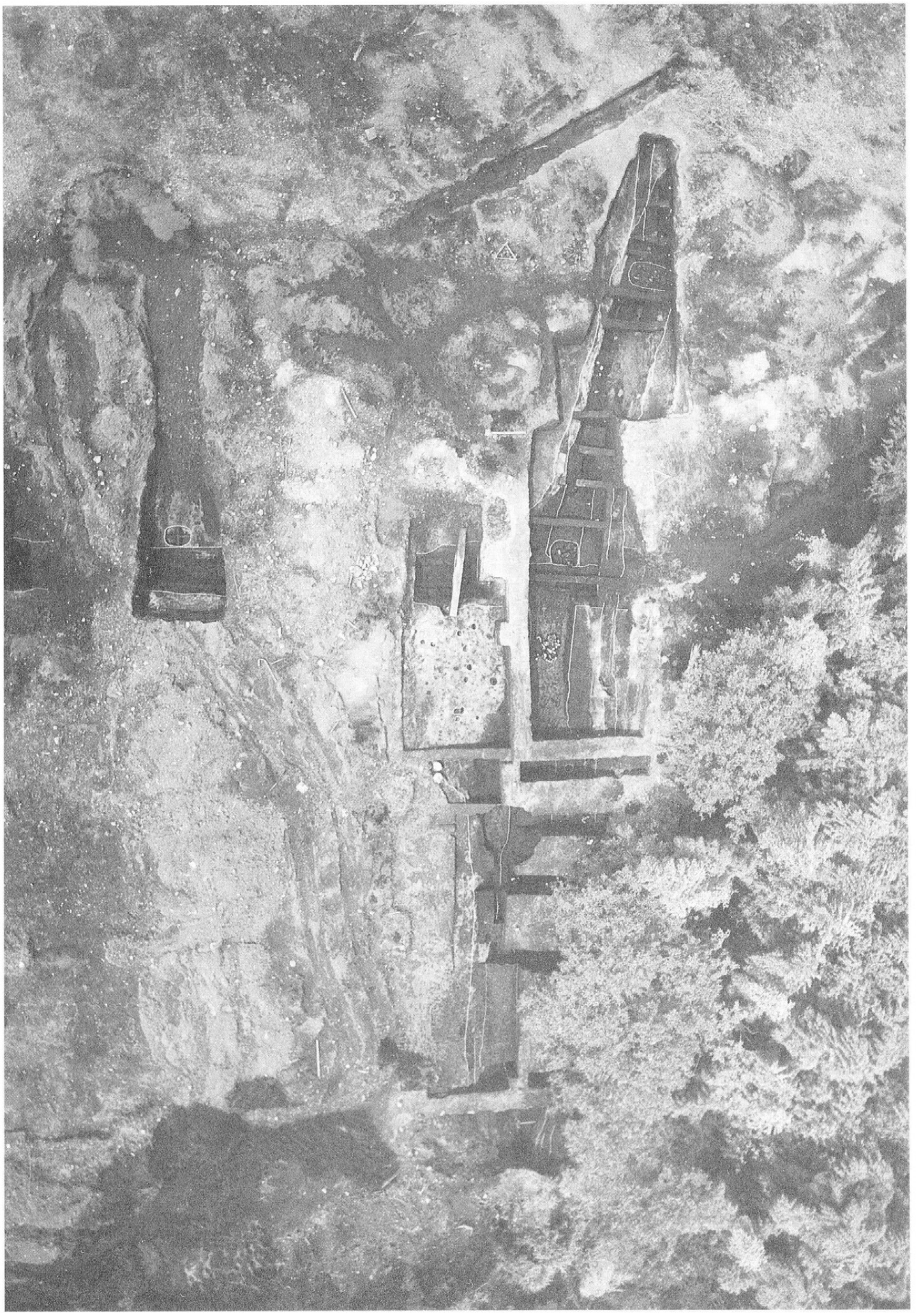
さかのぼって応永８年（1401）２月の神柱宮修造棟札写『荘内地理志巻之九十四』に，守護島津元久と「北郷讃岐入道沙弥道旦」が並記されているからである。この人物と既述の人物は同一人であり，北郷氏２代であること論を俟たない。しかし惜しいかな彼の実名（名乗）が不詳である。ただ『島津国史』には該記の項に原拠不明ながら「北郷誼久」と載せている。彼の存生下限はどうやら応永16年３月まで確認できた（『前編旧記雑録』巻卅一）。先の応永23年９月の梵鐘は，北郷讃岐守道旦の７回忌に子息の北郷知久らによって施入されたものと思われる。二代北郷氏の没年は通説では不詳とし法名も一致しない。これより逆算すると道旦の死亡年次は「応永17年」と推定されるのである。また寛正元年～文明６年（1460～1474）頃に，「北郷讃岐守義久」なる人が安永の城主として見えている（『行脚僧雑録』，『樺山文書』）。この人物は都城島津氏系図には所見がない。おそらくこの代までは北郷氏はやはり北郷に拠点を有していたとみるべきであり，北郷二代義久の都城築城説・二厳寺開基説も，当地中世史の根幹に関わることとて，都城中世史全体に厳正な再検討の必要を迫られる訳である。



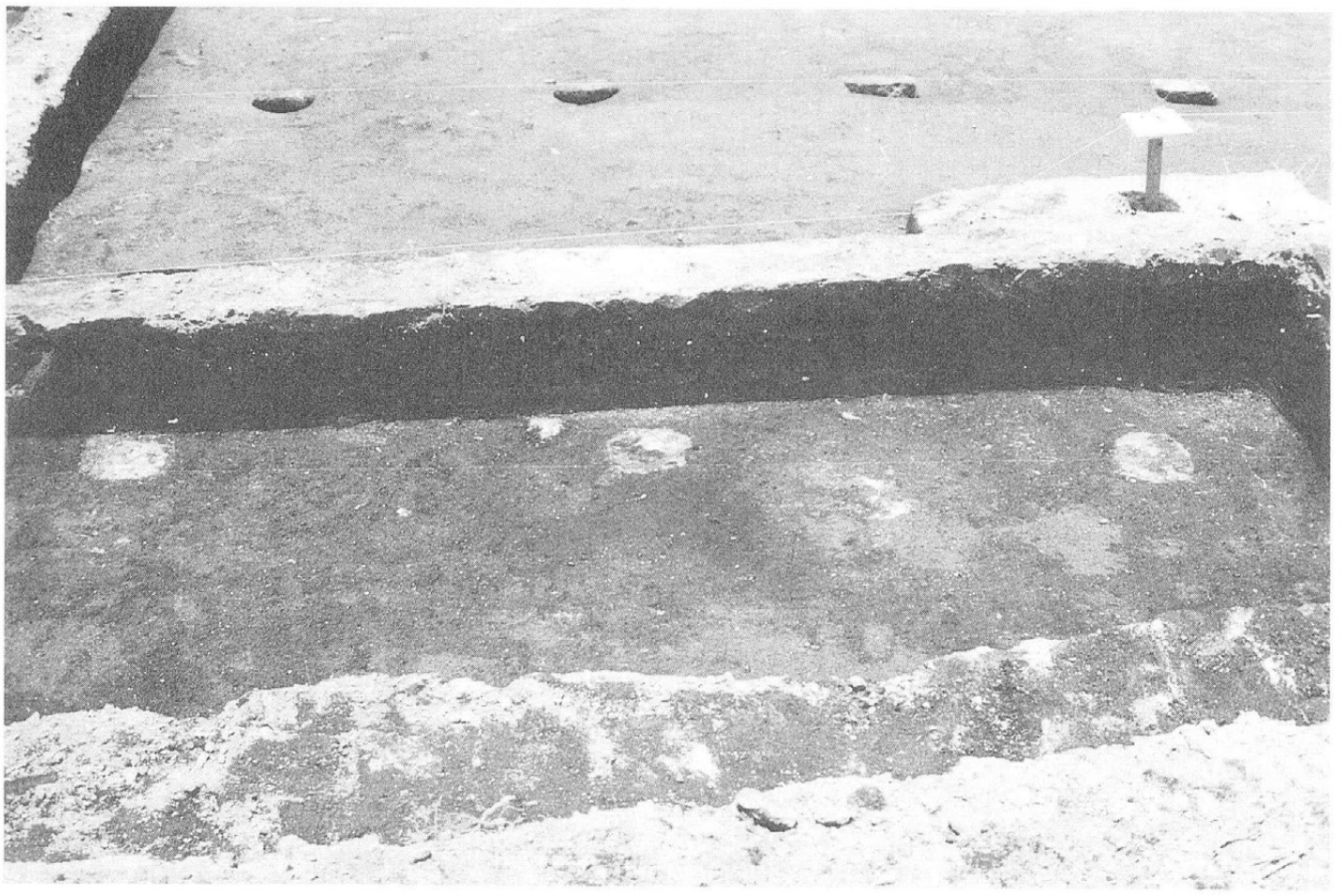
ＰＬ．１　調査区遺構完掘状況航空写真（上：ピット群〈Ⅰ区〉，ピット群・溝ー１〈左下よりⅡ・Ⅲ区〉）

PL.2　同(溝2・3・4・大溝－2・土坑1・ピット群竪穴遺構－1〈Ⅳ区〉)

ＰＬ．３　同(大溝ー２・土坑ー２・３〈Ⅳ区〉)

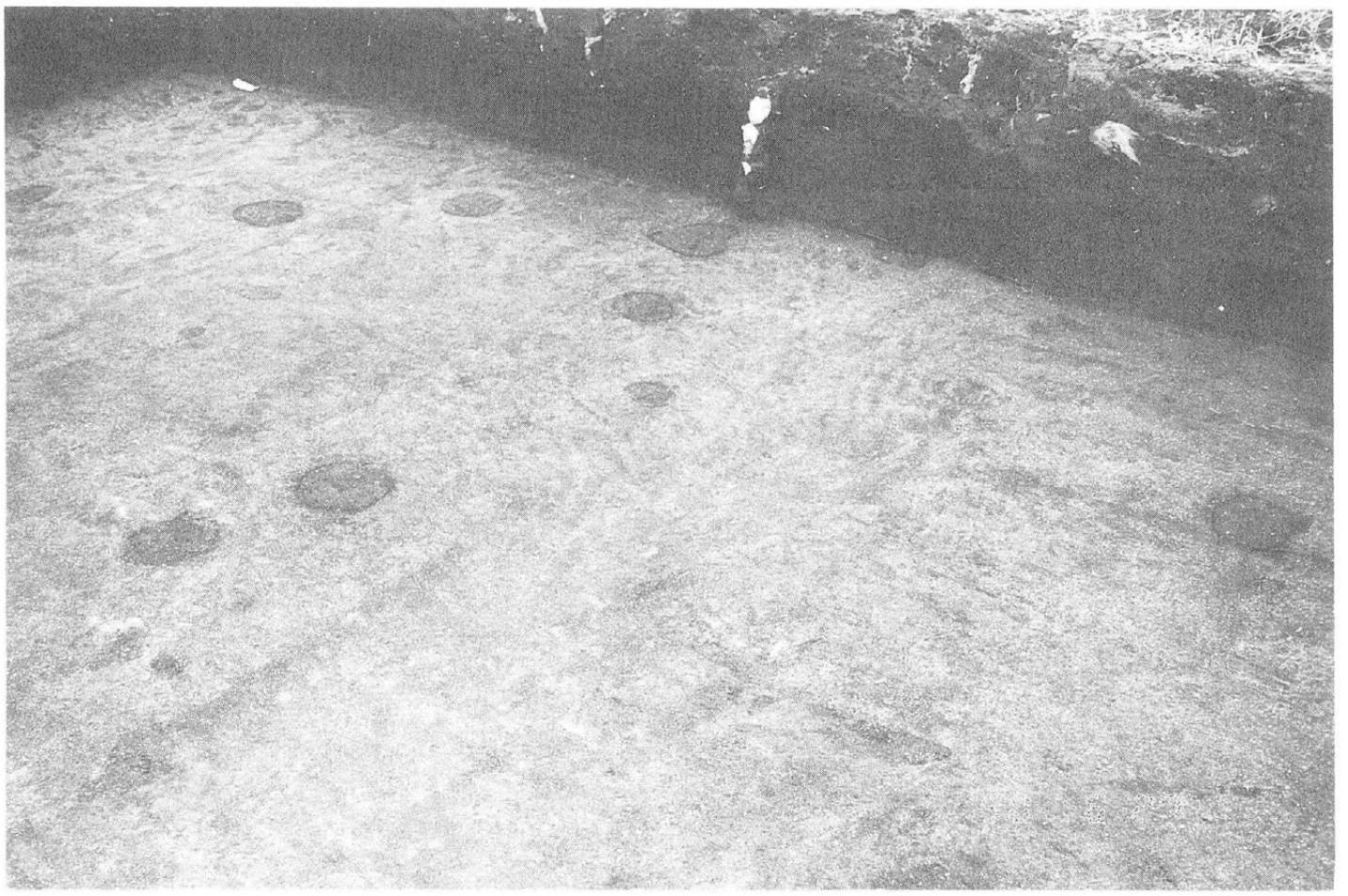


ＰＬ．４　同(大溝ー１・２の切り合い，土坑ー４～７・ピット群〈Ⅴ区〉)

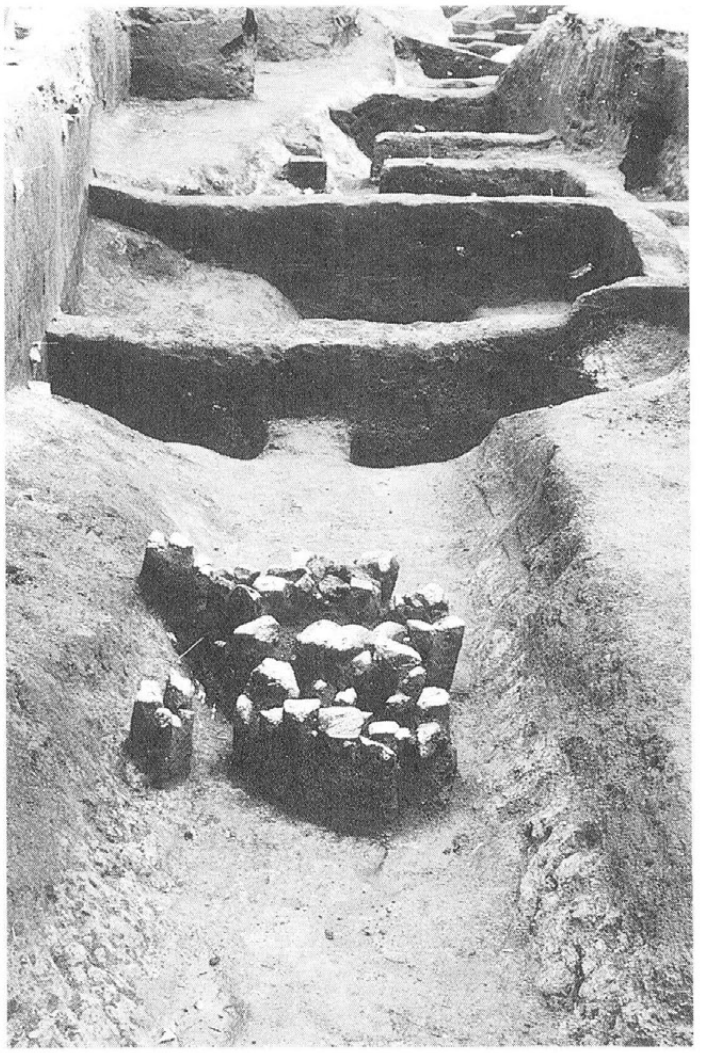


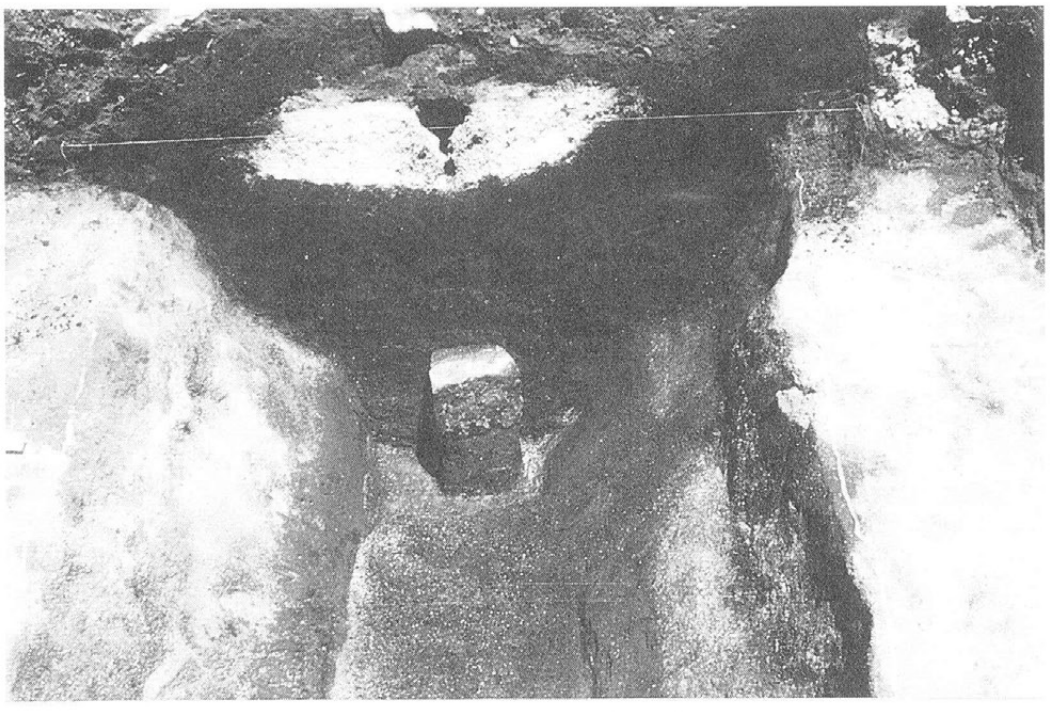
ＰＬ．５　検出された柱穴列〈Ⅳ区〉(上：近世)，畑の畝間に堆積した文明テフラ〈Ⅰ区〉(中世)

ＰＬ．6　土坑－5内の集石(Ⅴ区西側より)，溝－1(Ⅲ区東側より)



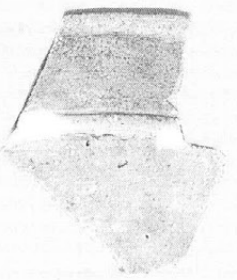
ＰＬ．７　ピット群の検出状況（Ⅰ区南西隅）竪穴遺構 ー1，ピット群（Ⅳ区東側より）



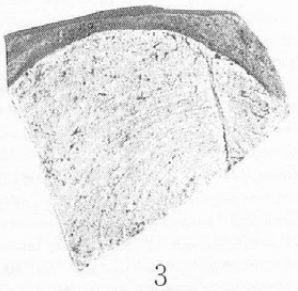


ＰＬ．８　大溝ー１・２の切り合い，硬化面下の軽石（Ⅴ区），下は大溝ー２覆土内の板碑残欠部

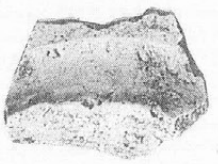
1



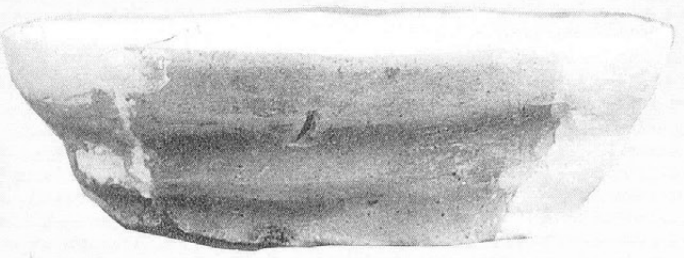
2



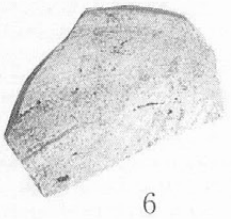
3



4



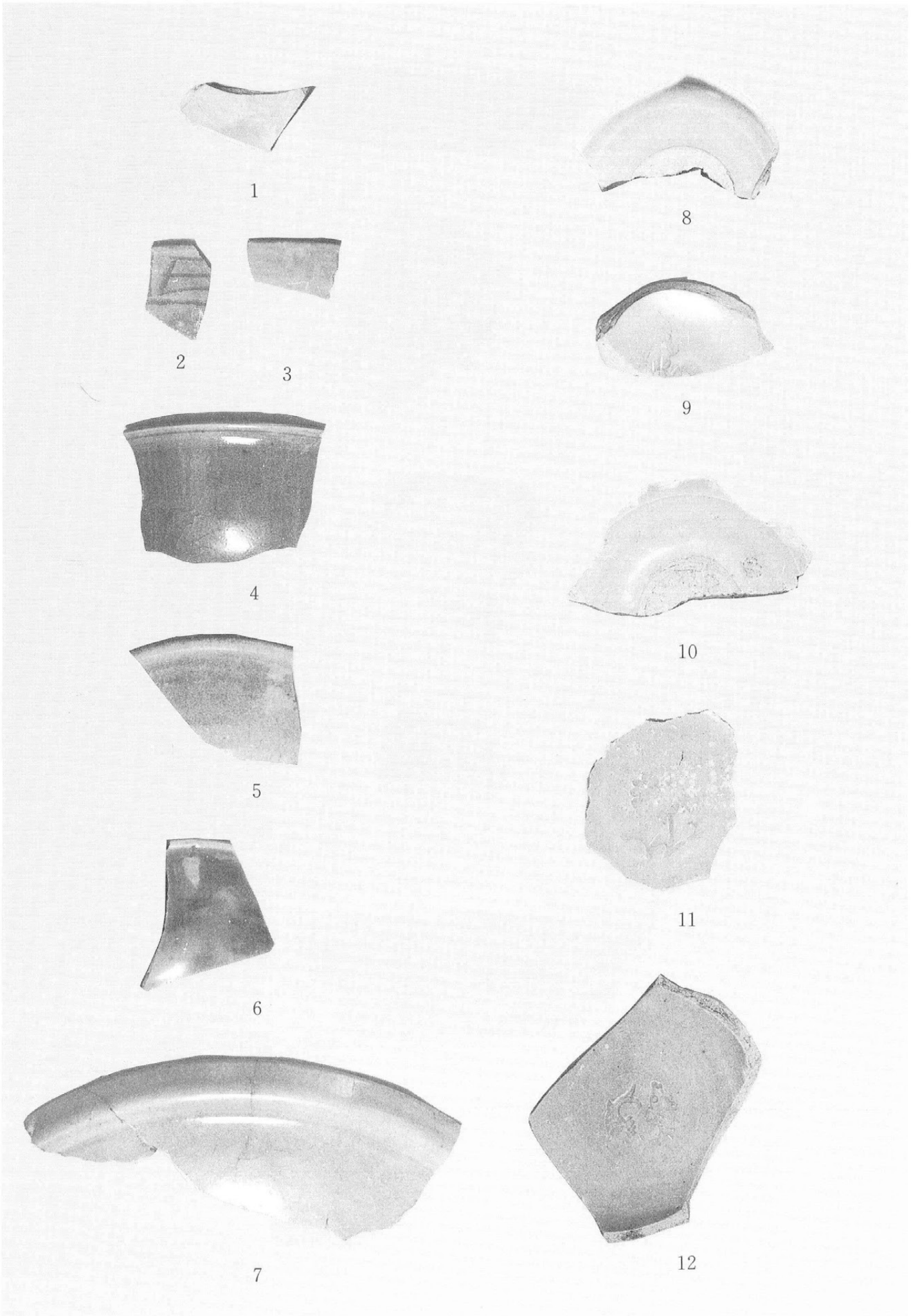
5



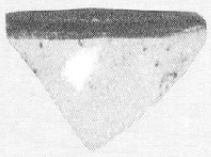
6

7

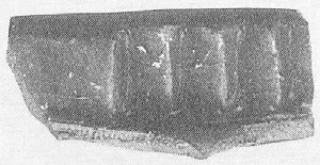
PL．9　縄文土器・かわらけ類1・2（14C後半），3・4・5（15C），6・7（16C）



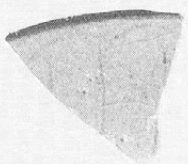

**ＰＬ.10　出土遺物　舶載磁器**（青磁）（右上は12～13Ｃ，以下は14Ｃ後半～15Ｃ中葉）



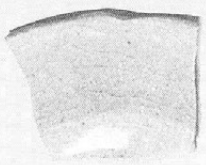
1



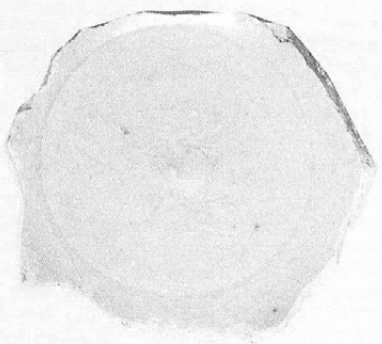
2



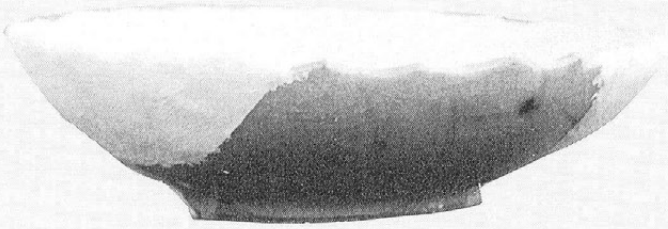
3



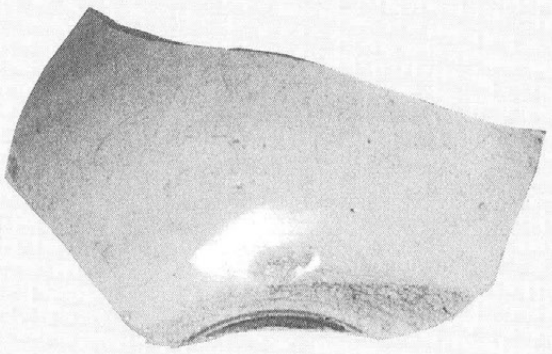
4



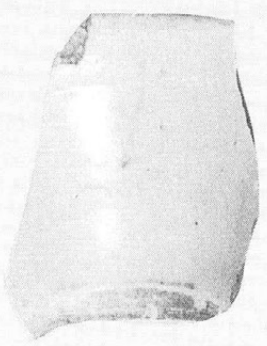
5



6



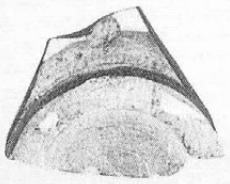
7



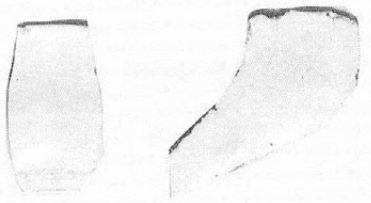
8

9

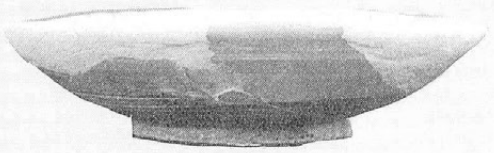
**PL.11　舶載磁器**(青磁)**1・2**(明代),**3～5**(15C後半～16C中葉),**6・7**(16C),**8・9**(16C～17C初頭)



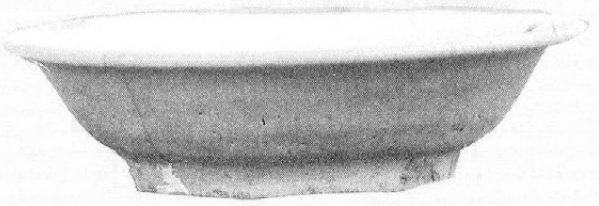
1



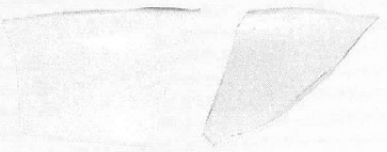
6 7



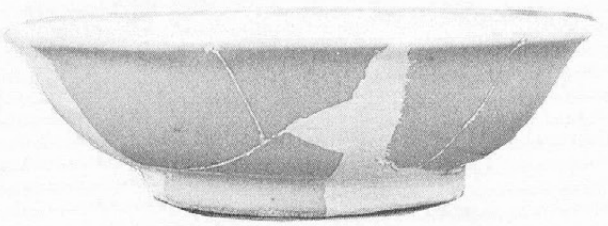
2



8

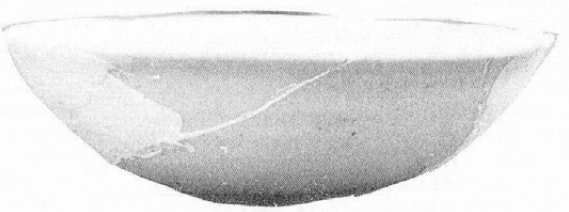


3 4



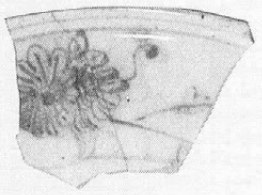
9

5

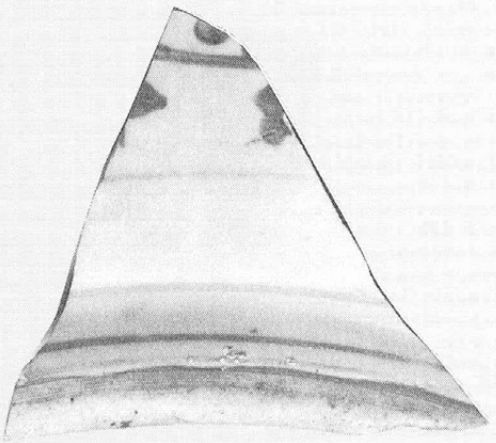


10

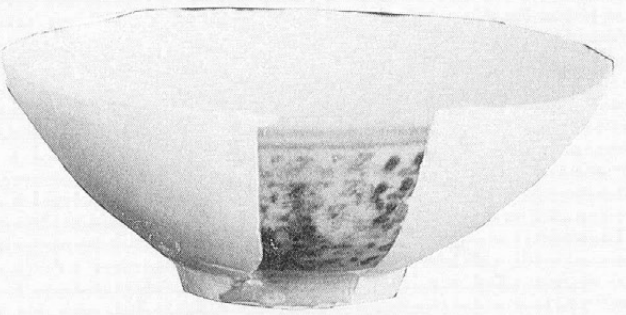
PL.12 **舶載磁器**(白磁) **1・2** (15C), **3・4・5**(15C末～16C中葉), **6・7・8**(16C), **9** (15C末～16C後半), **10**(16C後半～17C初頭)



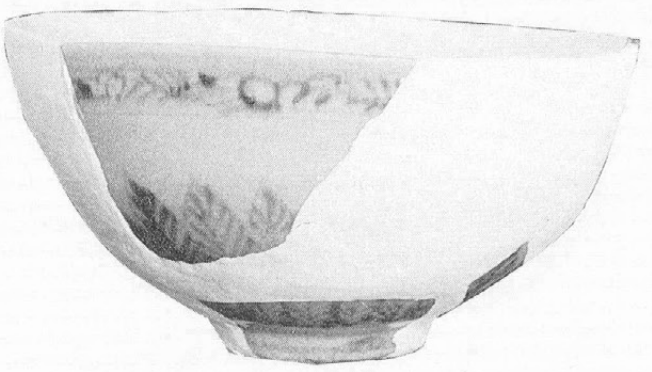
1



2

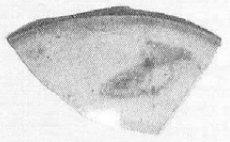


3



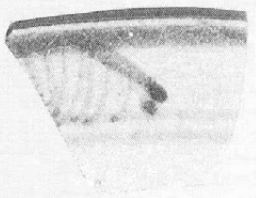
4

PL.13　**舶載磁器**(青花) 1・2 (15C), 3 (15C末～16中・後半), 4 (16C前半～中葉)

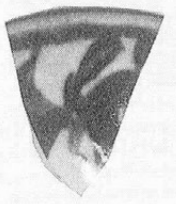


1

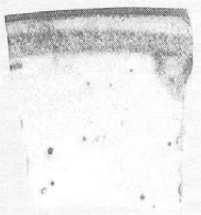
6



2



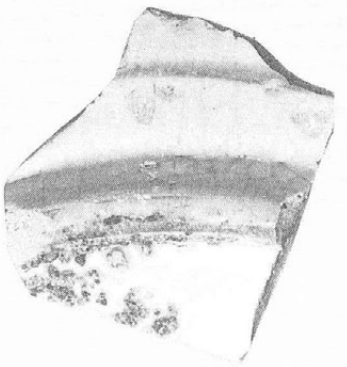
7



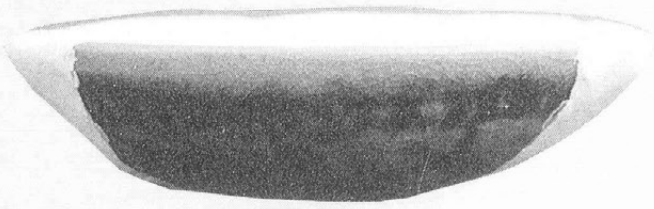
3

8

4

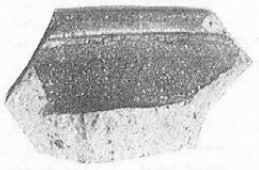


9

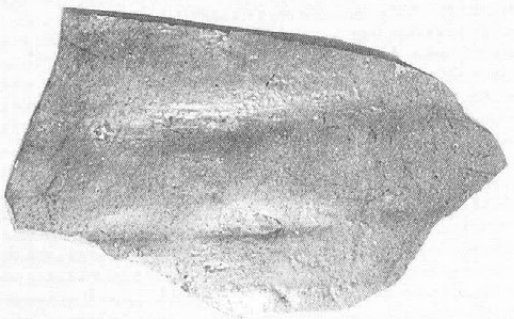


5

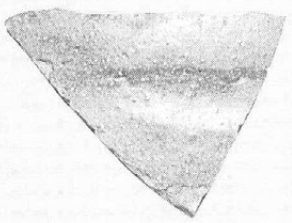
**PL.14　舶載磁器**(青花) **1～5**(16C), **6・7**(16C中葉～17C初頭), **8・9**(16C後～17C初頭)



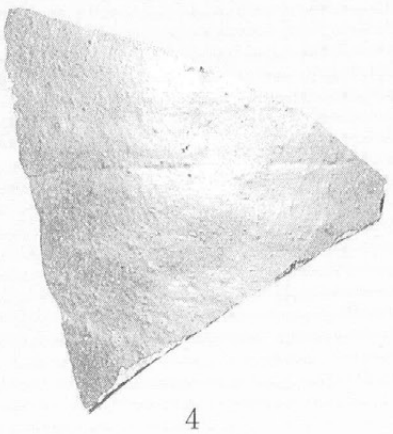
1



2



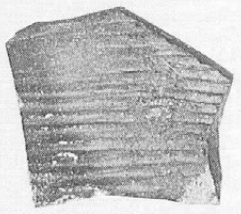
3



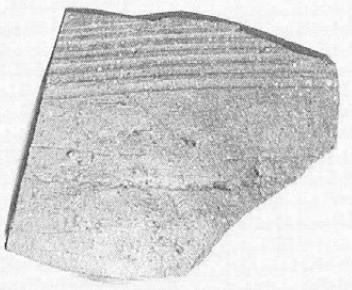
4

5

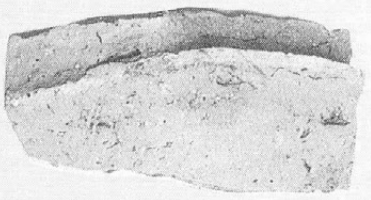
ＰＬ.15　舶載陶器(褐釉)明代



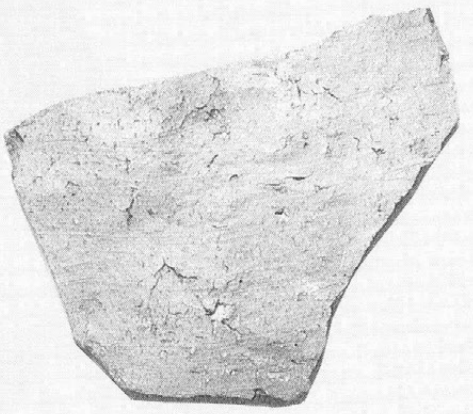
1



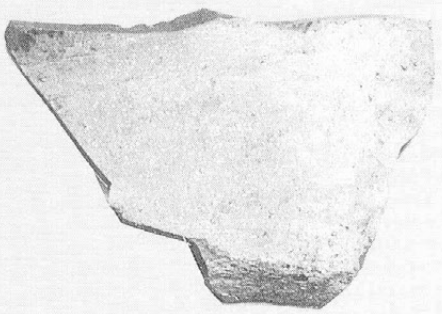
4



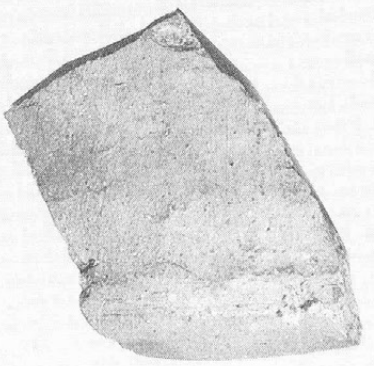
2



5



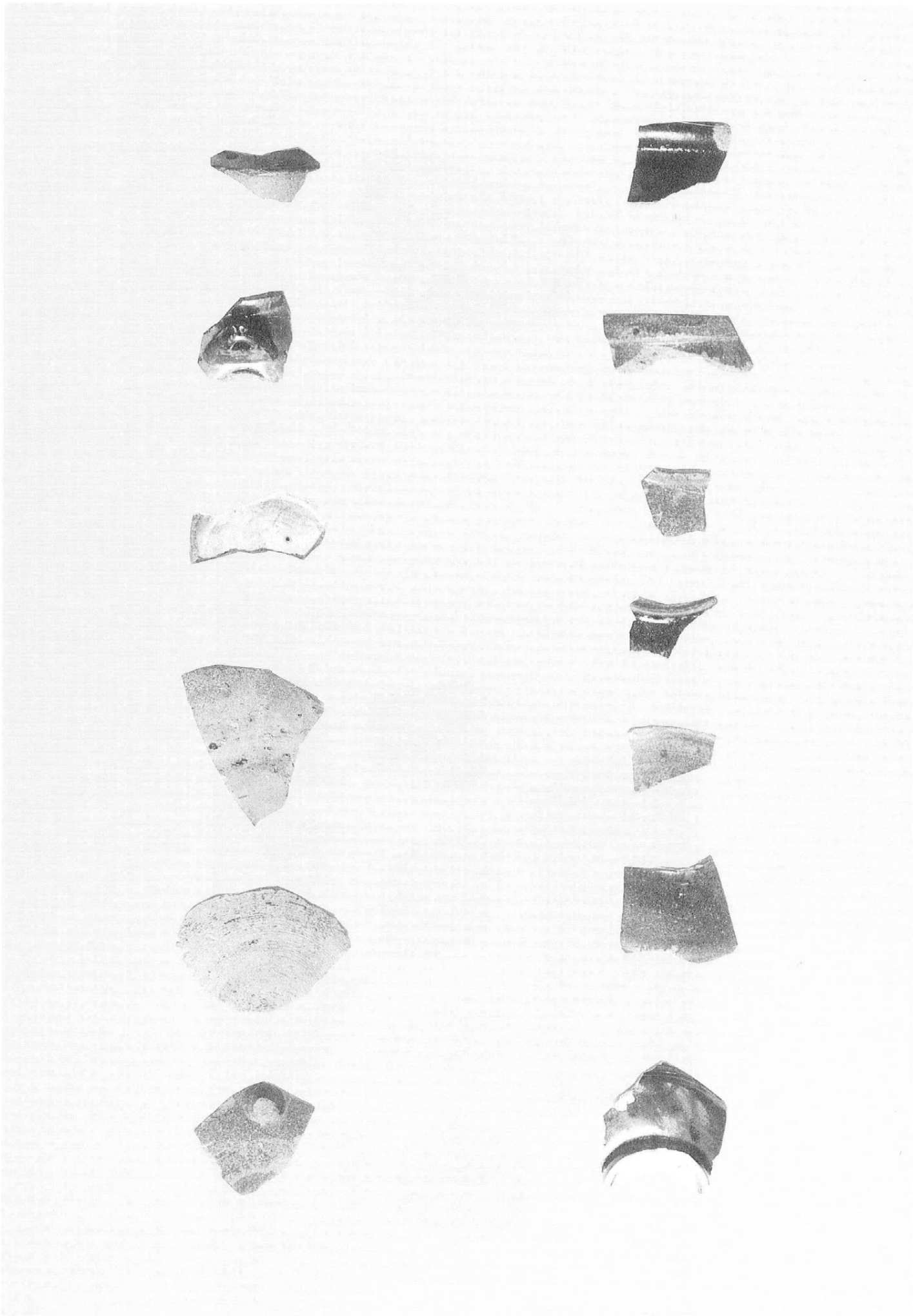
3



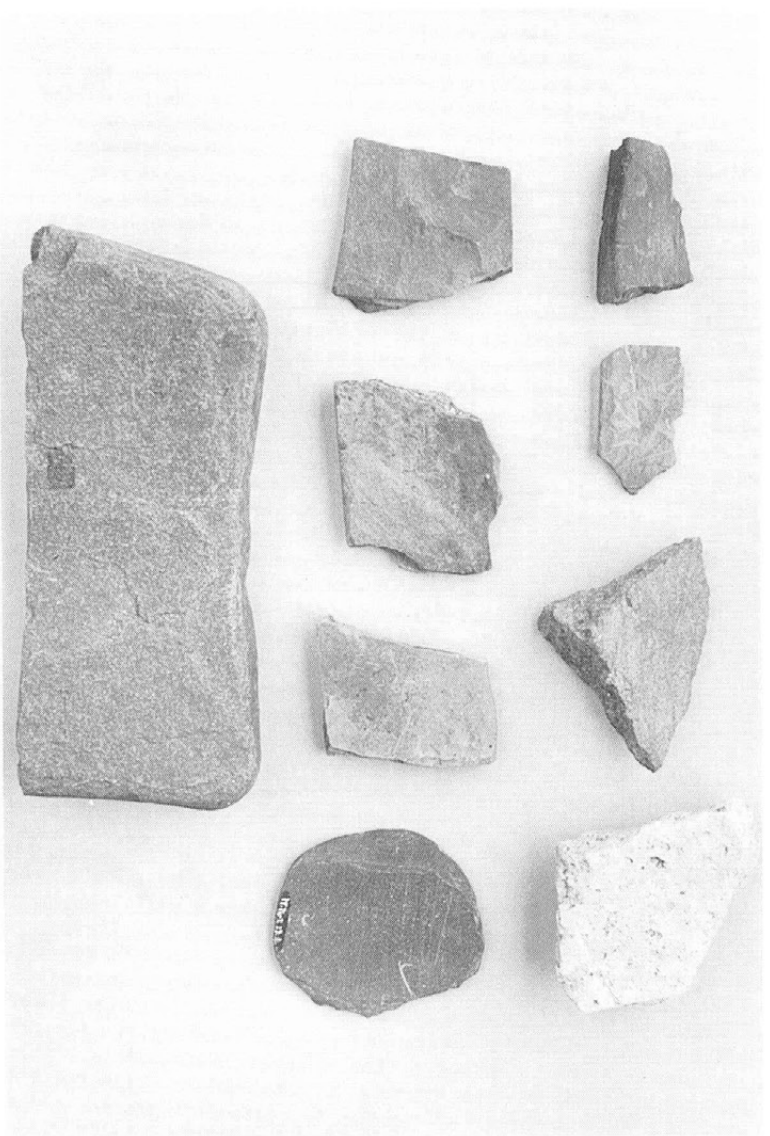
6

7

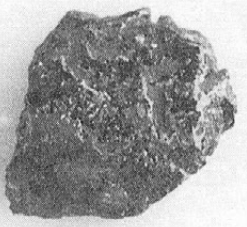
PL.16　陶器類 1 須恵質土器(13C末), 2・3 備前焼擂鉢(15C), 4～6 同甕(15C), 7 備前焼擂鉢(16C)

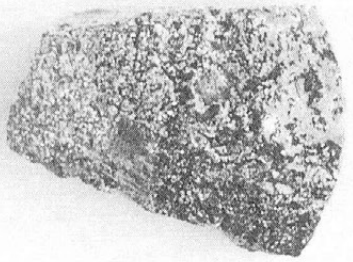


PL.17　陶器類（在地系　近世）



PL.18　石製品（上：滑石製石鍋片，下：砥石類）





PL.19　るつぼ・鉄製品（釘・鏃・刀子・紡錘車他）

都城市文化財調査報告書　第15集

**都之城取添遺跡発掘調査概報**

発行日　　１９９１年３月３１日
発　行　　都城市教育委員会

印　刷　　㈱都城印刷